関山

かんざん

第14号

寺報　中尊寺

関山
中尊寺〈寺報〉第十四号
平成二十年（二〇〇八）一月

目次

寺報　ぐらびあ　貫首　山田　俊和　6

普皆平等　遠藤　公男　9

平泉、自然遺産の危機

異国の風を帆にうけて A voyage to well known　ジェマレッティン・オルハン　14

命の砦「駆け込み寺」が教えること　鈴木　敦子　22

中国古刹片々
〈中国仏教協会・国家宗教局表敬訪問ならびに天台山参拝記〉　佐々木邦世　25

春の御神事　破石　澄元　48

〔レポート〕
世界遺産石見銀山遺跡見学記　菅野　澄円　52

〔讃衡蔵館蔵品展〕
「帰ってきた金字経」開催報告　菅原　光聴　55

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕
こんな一年でした　佐々木典子　57

伝承の現在　破石　晋照　59

〔中尊寺研修旅行〕
「世界遺産白神山地トレッキング」　鈴木　陽子　61

〔仏教史特講レポート〕
「平泉における浄土思想の展開」敗著泰衡への視点　木村安希子　64

風信・語録　66

研究／出版　68

関山句嚢・関山歌籠　72

陸奥教区宗務所報　第二部　中尊寺関係　83

御神事能番組　87

執務日誌抄　89

〔中尊寺宝物館　讃衡蔵　テーマ展〕
「平泉」伝承の諸仏〈予告〉　104

御奉納者　御芳名　105

浄財御奉納者　御芳名　105

赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名　107

不動尊篤信御奉納者　御芳名　107

〈表紙〉
世界遺産登録　イコモス現地調査
（金色堂）

常陸太田市　金砂郷薬師如来坐像（記事104ページ）
〈本年10月28日より讃衡蔵にて公開〉

中尊寺訪中団　天台山国清講寺に方丈可明法師を表敬訪問（10月13日）

得度式（11月11日）
一山瑠璃光院・円教院法嗣が得度。

時報ぐらびあ

八月二十七日、世界遺産登録に向けてユネスコの諮問機関、イコモス（国際記念物遺跡会議）による現地調査。調査員のジャガス・ウィーラシンハ氏が来山。

佛教文学会　平泉大会（9月29・30日）
義経東下り絵巻、西行・芭蕉の旅がテーマに

地唄舞奉納（4月30日）
境内、白山神社能舞台において日本舞踊上方舞　吉村ゆきぞの師他による地唄舞「八島」・「長刀八島」。

AED（自動体外式除細動器）普及救命講習（3月28日）
一山僧侶・職員供にAED取扱いのための講習を受けた。

春の藤原まつり、中尊寺神事能（5月4・5日）
一山の子供達が狂言「しびり」「清水」を演じた。

平泉町公民館主催の**わんぱく塾**（10月13日）
熱心に耳をかたむける子供達。

普皆平等

貫首　山田俊和

「普(あまね)く皆平等なり」藤原清衡公が、中尊寺創建に当り「中尊寺落慶供養願文」に述べられた言葉です。今から八八二年前（天治三年・一一二六年三月二十四日）のことです。

即ち「二階鐘楼一宇」の項に、「右、一音のおよぶ所、千界を限らず。〝抜苦与楽〟、普く皆平等なり。（中略）鐘声の地を動かす毎に、冤霊(えんれい)をして浄刹(さつ)に導かしめん」と述べられております。清衡公はここで、敵・味方の別なく、この地において故なくして死んだ全ての人の霊魂を鐘声に乗せて、苦しみを取り除き、楽しみを与え、浄土に導きたいと述べられています。これは法華経の一乗の教えによる絶対的な平等観を根本としたものです。

お釈迦様は、「一切衆生悉有仏性」「山川草木悉皆成仏」と説かれています。衆生とは、人間だけでなく全ての生き物の意味ですから、人間・動物・鳥・魚・貝・草木・等々、命あるもの全ては、仏に成る素質をもって生まれてくる、そして、いつの日にか必ず仏に成ることを得る、と言うのです。

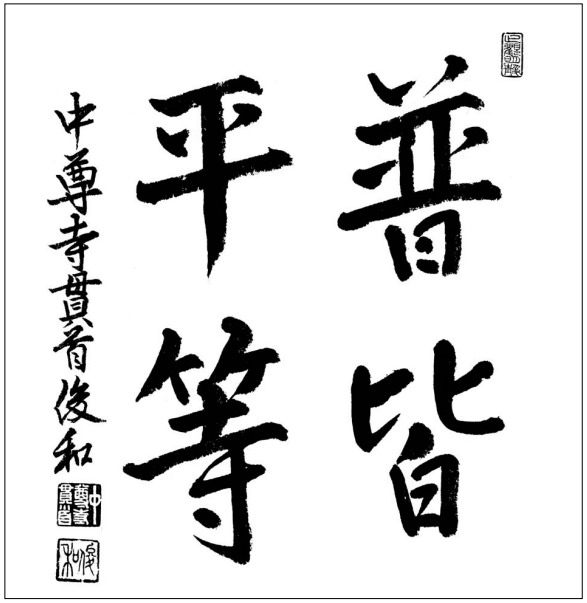
命あるものは全て大自然の恵みなくして生きることはできません。この世の中に存在する全てのものが、互いに深く関係しあい、皆平等に生かしあっていることを知らなければなりません。今世紀の最大のテーマになった温暖化問題・自然と共生し環境を大切に守り伝えるということは、仏教の絶対的な平等観なくしては成り立つものではなく、それは清衡公が「普皆平等」と述べられた意(こころ)と相通ずるのです。

今日の世相は、物質文明が発達し、何もかもが便利に豊かになったといいながら、心がどこかに置き忘れられたアンバランスの時代とも言われています。今、世界を見れば、飢餓、難民、人権、環境、民族紛争等々の問題があり、国内を見れば、世界の問題に加え、親子、家庭、社会、教育、政治等々あらゆる分野に問題を抱えています。

私達は、誰もが持っている尊いもの、即ち生あるものは必ず仏に成るという尊い命を、生かされ、生きている、と言うことを、全ての人々に、生あるものに、認める心を持つことが大切です。他を尊重し、認め合う、宥(ゆる)し合うという心が、法華経に説かれる「人中の尊」です。

清衡公は苦しい戦いの中から怨念(おんねん)を捨て、「非戦」を誓い、中尊寺建立を浄仏国土（自らの心を浄くして共に生きる仏土）建設ととらえられたのであります。

私達は、まさに「人中の尊」に心を致すことが、真の「普皆平等」を得ることになります。



平泉、自然遺産の危機

遠藤公男

豊かだった平泉の自然

私は一関で一九三三年に生まれた。子どものころから生きものが好きで好きで……。

戦前だが、ゆでたシバエビを天秤棒のザルに入れて売り歩く人がいた。ピンク色でうまそう。だがその臭いを嗅ぐと、私は吐き気をもよおした。なしてだべ、と母に打ち明けた。すると、母はすまなそうに語った。

「お前が腹にいるとき……エビに当てられたんだもの」

母の胎内で被爆……中毒していたとは！

大学受験に失敗して代用教員となり、一九五二年、平泉小学校に赴任した。仕方なくなったのだが、これがおもしろい。子どもたちは純真、藤原三代の子孫たちはすばらしかった。そこで教師は天職と思った。以来受験はしない。

学校のまわりではヒバリ、毛越寺の裏山ではウグイスとホトトギス、フクロウもいた。田んぼにはヒクイナが巣をかけ、ヨシ原にはオオヨシキリ、カッコウ、達谷の近くではハチクマ、ツミというタカが営巣していた。中尊寺のまわりからはヤマドリのホロ打ちが聴こえ、夜は学校のまわりでヨタカが一晩中鳴いた。

毛越寺の池には、私が中毒した小エビがたくさんいて、メダカやトンボもカエルも水辺にきらめいていた。平泉の自然は、八百年前からさして変わりがないように見えた。

ふるさとの昔を尋ねて

そこで岩手の自然は無限と思った。近所の年寄りのハンターが、猟犬の子をくれて私は可愛がった。その人について歩いて、私はハンターになった。指導者がいない悲劇で恥入るばかり。シートンの動物文学に打たれて、苦悩の果てに私は銃を捨てた。

教員をしながら、ふるさとの野生動物、オオカミやオオワシはどうなっているのか疑問をもった。賢治の童話や『遠野物語』ではわからない。自分で調べようと奥羽山脈の分校へ希望して行った。県下でも特に僻地と見られた田山村ホロベという集落（今は八幡平市）で戸数八。電気はなく、郵便物配達区域外。村人は文盲でクマ狩りの名人の酋長がいた。

しかし、秘境の村でもオオカミはまぼろしだった。そこで県北ではどうかと、ふた冬、北上高地を横断して古老やハンターを訪ね歩いた。だが、私の会いたい野生動物はとうに滅びて、聴き取りもできなかった。五十年来るのが遅かったと嘆いた。

動物学者から作家に

そのホロベでコウモリを採集して疑問をもった。アブラコウモリのようだが原生林から飛んでくる。アブラコウモリは人家にすんで森にはいないものだ。おかしいと東京の学者に持って行き、ついに新種とつきとめた。学名に私の名前がついてモリアブラコウモリとなった。これに味をしめ、未知なるものの探求に情熱を燃やした。クロホオヒゲコウモリ、コヤマコウモリを発見して理科の教員といわれた。動物学にのめりこんで辺地校ばかり歩いた。

三十九歳のとき、半生の自伝『原生林のコウモリ』を書いた。それが全国読書感想文コンクール課題図書となった。出版社は素人をプロ野球に出したら、ホームランを打ったようなものと褒めた。作文は独学、子どもの文章を添削しながら磨いた。

そのころ、生涯に千羽近いワシを捕って家業とした猟師が海岸にいた。その人の伝記を書きたくて休みのたびに通った。内容が豊富で、教員をしながらでは書けない。四十一歳で退職し、ようやく『帰らぬオオワシ』を発表した。これは『遠野物語』と現代をつなぐ作品と評価されている。

やがて江戸時代のご家老日誌から、『盛岡藩御狩り日記』をまとめた。殿様はご政道はともかく、ツル、シカ狩り、鷹狩りに熱中していた。こうして私は、岩手の野生動物史を明らかにすることができた。いにしえのみちのくは、野生動物の楽園だったのだ。

今は日本野鳥の会で、一貫して野生動物と自然環境の悪化に警鐘を鳴らしている。

平泉の自然遺産の危機

この度、中尊寺から長部、翌朝、達谷岩屋をまわって平泉の文化遺産は大切にされているのを見た。だが、野鳥が貧弱なのに驚いた。シジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラ、コガラ、エナガなどが全くいない。彼らは二、三十羽の群れをなし、木々を巡って虫の卵や蛹などを食べていたものだ。モズもいない。スズメもほんの少しである。これは大変なこと、平泉の自然遺産は危機に立っていると診断せざるを得ない。

ヒヨドリが少々とカラスが目立つ。カラスは小鳥の巣やヒナを襲うのでたくさんいるのは困りものだ。

長部のヤマザクラの名所では、尾根のアカマツの木が枯れていた。伐採して焼却しないと元気のいい松に感染する。

スギの植林地は手入れが悪い。キツツキ類が営巣できる大木がない。昔の自然植生を調べて、広葉樹林を回復させることが急務だろう。（宮脇昭の本が参考になる）

また、堤防が整備されて、川辺の藪が貧弱なのに気づいた。無駄に見えるヨシ原とクルミやヤナギの藪が、モズやオオヨシキリに大切。そうした自然は、水の浄化と野鳥や水棲昆虫、稚魚のためにも必要なのだ。

自然は警告している

戦後、街にはアメリカシロヒトリが発生して街路樹に被害を与えた。毛越寺の松山にもマツカレハが発生した。やがて松の大敵、マツクイムシが猛威をふるいだした。マツノマダラカミキリが運ぶ一ミリもないマツノザイセンチュウが、アカマツやクロマツを枯らす。

近年、福島県から山形県でナラの木が大量に枯

れている。カシノナガキクイムシという五ミリほどの昆虫が根元に穴をあけて産卵する。するとナラの大木が突然枯れる。（ＮＨＫ東北スペシャル・ナラ枯れ・〇七年）

ナラの実のドングリは野生動物のために重要。ミズナラやコナラは薪炭材やシイタケのほだ木としても有用。これらが枯れることは生態系の危機。キクイムシの異常発生を防ぐ天敵の野鳥がいないのではないか。

何年も前から私は日本列島の夏鳥の激減を指摘してきた。ありふれた鳥だったヨタカ、ヒクイナは平泉にはもういない。毛虫食い専門のカッコウも消えそう。

高速を競うものがはびこって、海も山も川も大病である。啄木や賢治が見たらなんというだろう。まして藤原三代はことばを失う……野鳥の多くが生きられない環境が広がっている。

巣箱をかけるのはどうか。

虫を食べる小鳥を増やすため、巣箱の設置を提案したい。

従来の木の巣箱は利用率が低くてこわれやすい。そこで私は軽量セメント製のミヤコ式巣箱を開発した。架設が容易で二十年も使える。利用率がきわめて高い。シジュウカラ、ヤマガラ用だがスズメもよく入る。スズメも繁殖期には虫をよくとる。例えば宮古市常安寺。この巣箱を十数個かけて毛虫の大発生がなくなり喜ばれている。この巣箱は、使い終わった巣材を捨てることが大事だ。もう全国に三千個ぐらい普及させた。

モリアオガエルをいつまでも

金色堂の前の薬師堂の池には、まだモリアオガエルが産卵に来るという。五十年前、私は六年生と夏休みの一研究にこのカエルを取り上げた。子孫が生きていると知ってとてもうれしい。

近年、水田近くで養蜂家のミツバチが大量死した。稲の害虫。カメムシ防除に散布された農薬のせいという。ミツバチだけではなく、たくさんの生物が巻きぞえをくったろう。暗たんたる気持ちになる。

アメリカのレイチェル・カーソンは、ＤＤＴなどの乱用を『沈黙の春』で警告した。それが岩手にも迫っている。

野鳥やメダカ、カエル、トンボ、セミ、ホタル、エビなどのすめる自然が、平泉の世界遺産を支えるためにはなくてはならないものだ。そのことを、五十年の歳月をかけて思う。

（日本野鳥の会名誉会長　宮古市津軽石在住）

〔十二月一日、平泉文化会議所主催「セミナー東方」における講演を文章にしていただいたものである。〕

異国の風を帆にうけて
A voyage to well known

ジェマレッティン・オルハン

日本への憧憬

私が生まれたのは、トルコという国。大都市イスタンブールから遥か一三〇〇キロ東、冬になれば一メートルも雪が積もるエルズルムという町でした。

七歳の少年の頃。私の夢は、いつの日かイスタンブールをこの目で見ることでした。

やがて大学進学の折、少年時代の夢は現実となりました。

大学に入り、私は遥か離れた極東の地を夢見る青年になっていました。

世界の大都市・技術の最先端・夢を現実にする国……日本。

そして、ある日、その大いなる夢も現実となりました。

私の夢は大きな扉を開き、大きな喜びと苦悩を与えました。扉の先には憧れの地、日本がありました。

日本とトルコ

日本人とトルコ人、我々が、初めて関係を持ったのは一八八七年日本の使節団の方々がイスタンブールを訪問したことに始まります。そして一八九〇年、オスマン＝トルコ帝国は、この使節団への返事を届けるため、外航船エルテュールル号を横浜に向けて出港させました。乗員は六百九名だったそうです。けれども、その船は二度とトルコに戻ってくることはありませんでした。

エルテュールル号に乗ったトルコの使節団は無事日本に到着し、明治天皇に奉呈。その帰路、エルテュールル号は嵐に見舞われ、和歌山県熊野灘付近にて座礁してしまいます。しかし、地元の住民達は食糧難の中、自分たちの食料を分け与え、また懸命な救護もしてくれました。そのおかげで

六十九名の乗組員は命を取り留めトルコに帰国し、本国にこの出来事を報告。トルコと日本の親密な関係の始まりとなりました。後の、一八九一年、日本政府によりエルテュールル号の記念碑が和歌山県串本に建てられ、一九二九年には天皇陛下もその地をご訪問なさいました。

子供の頃に父や母からそんな話を聞かされていた私にとって、日本という国が身近な国となり、やがて憧れの国となったのは、今になって考えれば、必然と言えるのかもしれません。成田空港に降り立った私は、即座に異国の風を感じ取りました。それは、アームストロング船長が月面に降り立った時に感じた月の風にも匹敵するのではないかと思ってしまうほど、大きな大きな衝撃でした。

そして扉は開かれた。

少年時代の良き思い出について話をできない人はおそらくいないでしょう。子供のころは誰でも驚く能力・感動する能力を持っています。しかし、年齢を経るにつれてその能力は磨耗してしまい、すべての出来事は、ありふれた、何の変哲も無い出来事になってしまうのです。そして時を同じくして、人々は未知なる外の世界へ船を漕ぎ出だし、新たな感動と驚きを捜し求める旅に出るのです。

それは、自分でも同定できない漠然とした『何か』からの旅立ちであり、そしてまた同じように『何か』を求める航海なのです。

「なんたることか！洋ナシが無ければ
りんごで満足できたのに」

トルコ人にとっての日本・日本人

親日国であるトルコ国民にとって、日本人はこの世界でもっとも勤勉で善良なる国民であるという認識が、おおよそを占めているといっても過言ではありません。一方、国民の多くが勘違いしていることもあります。それは、『東アジアは東アジア、東アジア人はみんな一緒、どの国でも同じものを食べていて、同じ言葉を話している』ということです。

トルコのテレビなどでは、中国料理が日本料理と紹介されることや、韓国の映像を日本のものだとして放映していたりもします。東アジアの理解という面においては、まだまだ情報が不十分だということは疑いも無いことなのです。もっとも、日本においても『外国人は外国人、アメリカ人もイギリス人もみんな一緒』という傾向がありますから、これは世界中で同じことなのかもしれません。

しかしながら、近年は、インターネットに代表されるコミュニケーション技術の大幅な革新や、トルコを旅行者として訪れる東アジアの人々の増加。また東アジア諸国のドラスティックな発展状況によるマスメディアの注目などにより、勘違いはだいぶ改善されてきているようです。しかしそれは、そのような情報文化に接することができる文化階級、中流階級以上の人間に限ったことで、スラム街に身をおく貧困層などには、まだまだ、東アジアの国々の理解は進んでいないのが現実です。

日本とトルコの都市・社会の発展過程の差異

すべての都市はそれぞれの香りを発しています。トルコにおいて、街はモスクを中心に発展してきました。人の集まるところにはモスクがあり、またモスクがあるところには人が集まってきます。モスクで礼拝をすることを習慣としている我々にとって、モスクが無い場所での生活というのは、考えられません。イスラム圏の都市すべてに共通することなのですが、街・社会・世界の中心はモスクなのです。

この観点において日本の都市を眺めて見ますと。その中心に見えてくるものは……新宿駅……大阪駅……京都駅……駅こそが日本の社会の発展の中心になっているのではないでしょうか。日本の駅では、何千、何万という人々がすれ違い、それぞれの目的地へと向かって行きます。電車が到着すると人がどっと流れ込み、駆け足で流れる人の川ができます、そこに辿り着いた我々も、そこに存在する川と同調して、自分でも理由がわからないままに駆け足になり、その川を構成する魚の一匹となってゆきます。

駅のあるところに人は集まり、その利便性から住宅ができ、マーケットの集まる駅前は商業の中心にもなります。宿場町の時代から、日本ではこの駅というものを中心として社会というものが発展してきたといえると思います。

社会・共同体のあり方

日本もトルコも同じように道があれば商店が並びます。しかしながら、日本の道では、商店と同じように無機的な機械たちも売買活動に参加してきます。タバコ・飲み物に始まり、カサ、食料。たとえ店舗を構えている食堂に入ったとしても、食券なるものを機械が販売していれば、我々はそこに働く人間と一言も言葉を交わす必要はありません。売り手と買い手との間には鉄の塊があり、売り手はその鉄の塊に商品を詰める。そして買い手は金銭を投入し、その塊を空っぽにする。彼らの間にコミュニケーションは無いですし、一体全体どんな人間が売っているのかさえ知ることなく商品を手に入れてゆく。これは、最近の日本が抱える大きな問題の一つではないでしょうか。人々は、よりよい自己実現や、楽しい毎日を求めて、寂しい田舎から、賑やかな大都会へと移り住んできます。しかし実際に生活をしてみると、賑やかに見えた大都会は表面だけで、コミュニケーションの希薄さから、やはり一人ぼっちを感じてしまう。これでは健全なる共同社会というものは育っていかないのではないでしょうか。

トルコにおいて商店は社会におけるコミュニケーションの中心で、もし我々が、誰か特定の人について知りたかったら、その人の住む町の商店街の人間に尋ねれば、その人について大方知ることができます。トルコの商店街では、老若男女を問わず、見ず知らずの人間同士がコミュニュケーションを取りあっているのです。『個人情報』という観点から見れば、トルコではその意識が希薄であるということができるかもしれませんが、トルコにおいて人間は『個人』という性質を持ちな

がら、同時に共同体を構成する『仲間』であり、共同体が安心のうちに存在するためには、誰しもが個人の情報を開けっぴろげにすることを厭わないのです。これはイスラム教的価値観である『アラーの前では誰もが平等・均一の存在である』ということに根ざしているのかもしれません。

共通のアイデンティティー

バイラムとはイスラム教徒にとってのホリデー（聖なる日）です。バイラムのイスラム国家では、道端で、学校で、テレビで新聞で、国家を挙げてその日を祝います。バイラムの時には、たとえイスラム教徒でなくてもその異常さ、非日常ぶりを感じるでしょう。

私の海外での初めてのバイラムの経験は日本においてでした。日本にも沢山のイスラム教徒の友人がいましたが、やはり異国の地で迎える初めてのバイラムは特別なもので、何だか緊張すらしてしまったことを今でも思い出します。東京のモスクにみんなで集まり礼拝をしました。礼拝の後は隣で礼拝をした人と抱き合い、喜びを分かち合うのがイスラム教徒の習慣です。自国にいたときは、両脇はトルコ人というのが当たり前だったのですが、そのときには、左隣にアフリカ人、右隣にインド人という国際ぶりでした。少しだけ躊躇しましたが、トルコにいた時と同じように彼らと旧知の親友のごとく抱き合い、故郷から遠く離れた日本においてもイスラム教徒の人類愛を感じてうれしく思ったものです。

日本のお正月は、我々のバイラムと通ずるものがあるのではないでしょうか。国をあげて新年を祝い、口々に「あけましておめでとう」と挨拶しあう。日常と違った光景が正月の期間には感じることができます。我々と同じように異国の地に居るときにでも、日本人同士は新年を迎えたときには「あけましておめでとう」と挨拶しあうのだろうなあなどと想像すると、私はなんだかとても暖かい気持ちになるのです。同じ文化圏に育ったものの同士が、たとえ遠く離れた地に居たとしても、お互いに喜び合える何かを持つことは、見知らぬ

地においてのアイデンティティー確立のための手段として、大いに心強いものだと私は思います。日本の〝若者〟と呼ばれる世代の人たちは、とかく自国の伝統文化を軽視してしまう傾向がありますが、それこそが若者のアイデンティティーの喪失に繋がっているのではないでしょうか。宗教的なもの、伝統的なもの、生活習慣的なもの、何でも結構なのです。共通の心のよりどころを作っておくということが、これからの国際社会に生きる日本の若者たちにとって大切なことであると私は思っています。

日本人の素晴らしい美徳

高校野球、というスポーツは日本の美徳を端的に表したすばらしいスポーツだと思います。あるとき私は友人に無理やり高校野球観戦に連れて行かれました。野球はトルコではあまり知られていないので、試合自体には熱狂できませんでしたが、私は選手たちの姿に熱狂してしまいました。勝ったチームも負けたチームもお互いに相手を尊重し合い、深々と礼をして球場を出て行く。他の国では考えられないことです。トルコでも高校のサッカー大会などありますが、あまりの熱狂で選手同士が喧嘩をしてしまうことすらあります。そもそも、球場という人格を持たない「場所」に対して彼らは敬意を表し、その上で試合を始める。このことは、剣道・柔道・華道・茶道等、日本の伝統文化には共通の価値観ですね。場所や道具を神聖化して、それを畏れ、敬意をはらうのです。日本が世界に誇る素晴らしい「精神の文化遺産」だと思います。前述の若者のアイデンティティーの話しともかかわって来ますが、若者達がこの精神を未来永劫継承してゆくことを私は願います。

トルコという国

オスマン＝トルコ帝国が消滅し、トルコ共和国が建国されました。

オスマン＝トルコ帝国が絶えた時、それまでヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカに生活していたトルコ人はアナトリア（現在のトルコ中

央部に位置する平原地帯）の大地で生活することを余儀なくされました。彼らがアナトリアに移り住んだとき、彼らはそれぞれの場所で育まれた自身の文化、生活習慣、言語を持ち込みました、それらは全て彼らが生活していた場所の地理、気候風土に根ざしたバラバラのものでした。そういうわけで、現在トルコには様々な人種、言語、生活習慣、思想体系が混在しているのです。同じトルコという国に生活していても、すこし違った言葉を話す友達が学校に居たり、友達の家でご飯を食べると、自分の家とはまったく違ったものが出されたりします。一つの物事を決定するにしても様々な価値観・考え方によって、それぞれ違った結論をだしてしまう。単一民族で形成されている日本という国に住んでいるみなさんには、なかなか理解しがたいことかもしれませんが、私はそんな国に育ってきました。

これから

私がほかの国から来た外国人の人と話をしていると、彼らの中にはまだまだ日本という国に順応できていない人が沢山居ます。自分の育った国の習慣と日本の習慣との間に生じた摩擦によって、日本という国が嫌いになってしまい、志半ばに帰国してしまう人もいます。日本から海外に旅立った人の中にもきっとそういう人がいることでしょう。しかし、私はいつも思います。トルコという一つの国内でも様々な価値観が存在します。きっと地球の人口が六〇億人居たら、価値観の形・判断基準も六〇億あることでしょう。そういった様々な価値観を全て尊重し、排斥することなく、譲り合い、許しあい、手を取り合って、この地球という隔絶された一つの星に生きてゆくことが大切なのではないのでしょうか。私は、いろいろな国を回るときに一番感動をするのは、その国の料理のおいしさを堪能することでも、独特のみやげ物を買うことでもないのです。その国に住む人々と、友達になったとき、話をしたとき、喧嘩をしたとき、地球に存在する新たな価値観をまた新しく知ること、それこそが私の楽しみなのです。

インシャアッラー！

最後に、イスラム教徒が使う有名でありながら、異文化圏の方々に正しく理解されていない言葉を紹介します

インシャアッラー！（全ては神の思し召すままに）

この言葉を理解できる異文化圏の方はなかなかいませんね。

これは何も我々の神への忠誠心を表すだけの言葉ではありません。

例えば、明日大切な試験があるとします。十分に勉強して寝る前に我々はこう言います。

インシャアッラー！

たとえ次の日の試験がうまくいかなかったとしても『神は、私にこの試験は合格しないほうが良かったとお考えに違いない、きっと私には他のやるべきことがあるのだろう』と思い込むことができます。良い結果も悪い結果も、それは神が我々に下さった大切な結果！

何も落ち込む必要は無いのです。そんな大らかなイスラムの精神、これを皆さんへの新たな価値観として、イスラム教徒より紹介いたします。

（イスラム文化・思想・研究会理事）

命の砦「駆け込み寺」が教えること

鈴木　敦子

「はい、駆け込み寺です」。電話の向こうで柔らかい声がする。その声を聞いただけで救われた気になる。

声の主は群馬県大胡町（現前橋市）にある施設の代表者の女性。かつてこの施設には、多額の借金や夫からの暴力などに追われた人たちが子供を伴い逃げ込んだ。だから、「駆け込み寺」。

一九七〇年代後半、経済成長が続く日本の片隅で、借金苦から親が子供を道連れに命を絶つ事件が相次いだ。コインロッカーでは生まれたばかりの赤ちゃんが見つかり、「コインロッカーベイビー」という言葉も登場した。

当時、養護施設などを運営していた地元の男性が親子心中を防ぐため、八一年、民家を改造し、ボランティアで駆け込み寺の活動を始めた。精神的に追い詰められた人たちを受け入れる最後の砦だった。

かつては最大二〇〇人もが身を寄せたという。日本全国から、幼子を連れた未婚の母や孫と共に預けられた高齢の男性もいた。家族とは違う「訳あり」の人々が集う共同体は、互いに支え合い、奇妙な連帯を生み、いつしかまた散り散りになっていった。

四半世紀以上が過ぎ、もはや駆け込み寺に助けを求めてくる人はいない。活動は事実上幕を閉じた。でも、その代表者の女性は今も優しい声と柔和な笑顔で出迎えてくれる。「命を粗末にしないでほしいの」。言葉は核心をつく。穏やかな表情の奥に光る眼差しが、これまでどれほど多くの人に安らぎをもたらしただろう。

この施設を初めて訪れたのは昨年春。なぜなら駆け込み寺にはもう一つの顔があったからだ。私の目的は「もう一つの顔」を取材することだった。

昨年五月、熊本市の慈恵病院の「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」が世間を賑わせたことは記憶に新しい。駆け込み寺には同じような設備が八六年から約六年弱、設置されていた。それは「天使の宿」と命名されたプレハブ小屋。二十四時間匿名で赤ちゃんを受け付けた。

当時の話を聞きたい。設置の経緯、その後子供たちがどう成長したのかを知りたい。私は施設の代表者の女性に会いに行った。これから書く記事を通して、微力ながら、ゆりかご論争で揺れる社会に向けて、「ゆりかご」が必要なほど追い詰められた人々を救う世間の寛容さや公的手段はないのかを、問いたいと思った。

関係者の話を総合すると、「天使の宿」設置のきっかけは、駆け込み寺の入り口に赤ちゃんだけが置き去りにされる事態が発生したことという。へその緒がついたままの男児が雨の降る朝に毛布にくるまれ、ダンボール箱の中で見つかり、「名前は〇〇〇です」と女性の筆跡のメモがあった。あと一時間遅ければ命が危なかったかもしれない、という。

小屋ができてから、騒がしい泣き声がしてスタッフが見に行くと、幼い兄弟三人が一度に預けられたこともあった。母親から子供たちを託された友人が、為すすべなく天使の宿に託したが、後に母親が来て三人を連れて帰ったという。

「生活の基盤ができたら迎えに来る」。駆け込み寺で暮らした派手めの美しい母親は、一緒に施設にやって来た女児にそう約束し、施設から借金して東京に向かった。しかし、二度と戻らなかった。母親を待ち続けた女児は美しい女性になり、

やがて出て行った。

施設は周囲の人々の善意と「何としてでも子供を守る」という情熱に支えられていた。自分の子供だけに過剰なまでの愛情を注ぐ現代とは事情が違ったのかもしれない。一方で、生き方が今ほど多様化していない時代。子供を見捨てた親を非難し、「同じ血が流れている」などと子供の人格を否定する大人も周りにはいた。

なぜ、わが子を手放さざるを得なかったのか……。真相を知り、解決策を探る風潮は当時はなかったのかもしれない。代表者の女性とは、福祉のあり方や子供の養育環境を巡り、たちまち意気投合した。

児童福祉の分野で活動してきた女性が一貫して力説するのは「人を信頼する気持ちは乳幼児期に芽生え、育つ」ということ。駆け込み寺で愛情を注がれた子供たちの何人かは、既に家庭を持っている。

駆け込み寺も天使の宿も、そう遠くない昔の話だ。私はあの女性の柔らかい声と芯の通った持論を聞きたくて、今日もまた車を走らせる。前橋市街地から約四十分。死を覚悟した人たちに寄り添ってきた施設に足を踏み入れる。そして女性の「あらぁ、元気?」という人懐っこい声と笑顔に癒される。

巣立っていった子供たちは、「ただいま」の言葉と共に、今も突然ふらりと施設に顔を見せるらしい。「おかえり」。普段どおりの会話が始まる。

どんなに悲観的な人生でも、誰かの支援で立ち直るチャンスを得ることを私はここで実感する。人の温かさで冷え切った心を溶かすことができる。

教育基本法の中身、学校の授業時間数の増減を話し合うことは確かに重要で、世間の関心は高い。だが、同時に、心の育つ根っことなる乳児期・幼児期の命を認められ、愛される養育環境のあり方を真剣に考えたい。

子供を育てる上でもっともっと大切なものがあることを、私はここで教えられた気がする。

（新聞記者・前橋市在住）

中国古刹片々

〈中国仏教協会・国家宗教局表敬訪問ならびに天台山参拝記〉

佐々木 邦 世

「本年五月、中国仏教協会学誠副会長・中国国家宗教事務局葉小文局長ほか訪日団が中尊寺来山の折、葉局長より日中友好交流のため訪中のお誘いがあり、後日さらに重ねてのご連絡を受けて、中尊寺訪中団を結成した。

山田俊和貫首を団長に、日中友好宗教者懇話会の会員である泰枝夫人、中尊寺から執事長澄順・参務三名（秀円・光中・邦世）、檀徒の岩渕勝次郎・イク夫妻、東京最勝寺ご縁の西春貞男・晶子夫妻ほか、団員十五名。これは十月十日より六泊七日の訪中覚書である」

十 日 （10：35 成田空港発 13：15北京到着）

機内にて見る華紙「北京晨報」に「今日甘露至無風晩也涼」の見出し。

北京に着いて先ず、日中友好仏教者交流の大恩人である、故・**趙撲初**（チョウボクショ）先生の、市内にあるお宅を表敬訪問。

＊ 趙撲初　1898～2000／九三歳。中国仏教界復興、日中仏教交流のみならず両国の文化交流の復活に多大な貢献。日中韓の仏教交流促進を目的とする「黄金の絆」運動も氏の呼びかけによって実現。中国書道家協会副会長。日本で仏教伝道文化賞（功労賞／1982）。

マイクロバスの窓外には高層ビルが林立して、今日的北京の景観がしばらく展開する。何年か前とは正しく一変した感も。ただ、趙氏の住居がある区域に近づくにつれて、街は、一昔前の旧態然とした、あの瓦礫・漆喰、ペンキで塗装したばかりの、下町というか路地裏といった感じである。

こういう巷（ちまた）を「胡同（コドウ）」という。居宅は、口の形に四方を建物で囲んだ構造で「四合院」といい、中の庭は「院子（イウンズ）」。添乗員の橋本清一氏（ジェイエッチシー㈱／東京虎ノ門）が、そう教えてくれた。交通の便だけでなくて、こうした

文化事情にもなかなか通じている添乗さんである。

＊ 以前、小説「陋巷（ろうこう）に在り」（酒見賢一／新潮社）を（途中まで）読んだ。その小説の挿絵を、私は思い浮かべて見ていた。陋巷とは、狭くむさくるしい、こうした路地裏を謂うのである。

趙撲初先生の故居の仏間は狭く、せいぜい二坪半ほどで、隣室が書斎である。といっても、これまたどうにか書物を読むに足るだけ、といった感じで、到底収め切れない膨大な図書・経典が外の庇（ひさし）の下に積まれたまま埃（ほこり）を被（かぶ）っていた。

居間で、九十歳を過ぎた白髪の夫人・陳女史から普段のままの会話を伺えた。なんと楚々とした居住まい。趙僕初という、大人（たいじん）はこうした陋巷の暮らしの中で思索し、中日韓の仏教徒の絆を大切にされていたわけである。

貫首が、持参した切子（きりこ）のグラスと中尊寺土産の衡年茶（こうねんちゃ）を夫人に贈られ、「このお茶には中国の薬草が20種、それに日本の薬草4種類をブレンドした美味しいお茶です」とことばを添えた。

夫人は「明日の朝は、これで主人（の霊前）に供えまし

よう」と、素直に喜ばれた。

あれこれ会話のなかにも知性が感じられ、贅とは程遠い一生を過ごしてこられたことが自ずと窺われた。庭に出て、一緒に記念撮影をしてから、「謝謝」「謝謝」と声を交わしながら辞した。

棗であろうか、中庭の枝に実がたわわになっていた。バスで京瑞大厦に向かった。

＊「厦」とは辞書には大きな家とあるが、多くの人が集まる「プラザ」と解した方がいい。

十一日

中国国家宗教局に向かう。こちらに着いてから我々に随いてくれているのが張丹さん。中国旅行社総社の日本部から派遣されてきたガイドさんである。タワーの斜脚、高層ビル、地価・格差から北京市民の今日的経済感覚というか、老後に対する備えとして投資か教育かビルを手にいれるか、そうした処世観にまで触れながら語ってくれた。

なぜか車の渋滞がなかったので時間より早く着いた。それで、什利海公園を展観。公園といっても、ここは孫文の

夫人・宋慶齢（中国人民共和国名誉首席）の故居。蔣介石夫人の姉であるから、院内に陳列してある物が違う。足を止めて、

「駆除韃虜恢復中華　創立民国平均治権」孫文

読んでいると時間の経つのが早い。

国家宗教事務局の門を入る。

斎　暁飛　宗教事務局副局長
郭　偉　外事司司長
薛　樹琪　外事司一処処長

ほかの方々に迎えられた。冒頭に、「皆さんをお誘いした当の葉小文局長が、ただ今、中国共産党全国大会の真っ最中で、そちらに出席しているので、どうしても此処にこれない」との釈明があり、あらためて昼食の卓を囲んでから挨拶を交わす。

「天高く馬肥える北京の好節……。今年五月に中日友好宗教者懇話会、設立四十周年記念の折には意を尽くして歓待をいただきました。御寺が、これまで一つの中

国を堅持してこられましたことに対して、また山田俊和中尊寺貫首が、日中友好宗教者懇話会の事務局長としてこれまで永きにわたって会の運営発展に尽くされてきたことに敬意を表します。ことに今年は、中日友好三十五周年の記念すべき年に当たり、その絆を永く支持したい」と。

これを承けて、山田貫首が、

「社会が豊になった反面、いろいろな問題が発生している。いま、中尊寺のあります平泉は世界文化遺産登録に向けて準備がすすめられていますが、中尊寺は、今から八百八十年前に藤原清衡公が自らの長い戦争体験を経て、戦争を起こさない、非戦の願い、実現のために建立された寺であります。私どもはこの清衡公の深い志念を世界中に向けて伝えていくことが大事な使命とうけとめ…。それぞれが調和のとれた社会の構築を実現されるよう、心から祈念致します」（要約）と。

午後、西城区阜城門内の古刹**広済寺**に中国仏教協会を

表敬訪問。なんと、赤地に「熱烈歓迎日本友人山田俊和長老等天台宗中尊寺友好訪華団」の長い横断幕が大雄殿の前に掛かっている。

内陣に入る。本尊釈迦像は白檀。その左右には弥陀・迦葉（十大弟子の一人）像が奉られている。

法要が済み、案内されて本尊壇の裏に回った。壁に垂下していた厚い布の覆い（カーテン）が、寺僧によって開かれると大きな図面が現れた。

＊ 秘仏画「勝果妙音図」（6m×15m）
清の乾隆九年（1744）、傅雯が奉勅画の端書がある。手の指先で描いた墨画で、画中には一〇八名の人物が描かれている。説明によると制作に九年を要したという。

賓客応接の間で、
一誠法師　仏教協会会長
演覚法師　広済寺方丈
ほか、秘書や侍者に迎えられた。
晩餐は、境内別棟で演覚法師などと精進料理を御馳走に

なった。目と口で、次から次と出される美味を楽しみ、五味ならぬ十五品皿の、まさに熱烈歓迎であった。

無論、こうしたおもてなしは特別であって、本尊壇の摩訶迦葉は衣食住すべてに「小欲知足」に徹した修行者。われわれは、食堂の壁に掲っている偈文を目に入れながら箸を伸ばした。

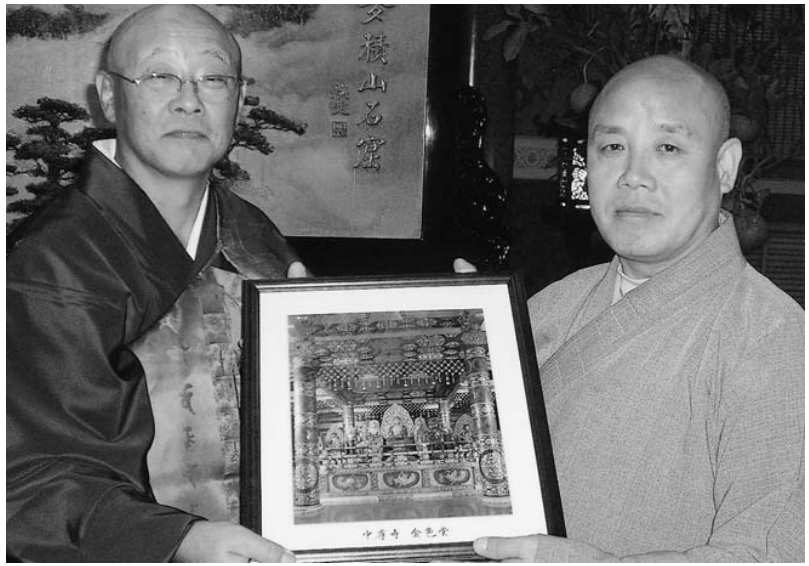
若見空鉢　當願衆生
究竟清浄　空無煩悩
若見満鉢　當願衆生
具足感満　一切善法

十二日

朝六時五〇分　ホテル京瑞大厦を発ち、空路杭州へ。この二日間、北京市内では車の渋滞がなく運転手が首を傾げるほど、交通事情は順調であった。多分、中国共産党全国大会の開催中で規制がかかっていたのであろう。

午後二時二〇分　**靈隠寺**参拝。

正面に掛けられたこの聯（標識）の字句を読む。



「台湾中台禅寺
浙江霊隠寺　結盟同源禅寺祈念」

政治を超えて、仏教界の交流や、有りようといったものが窺われる。

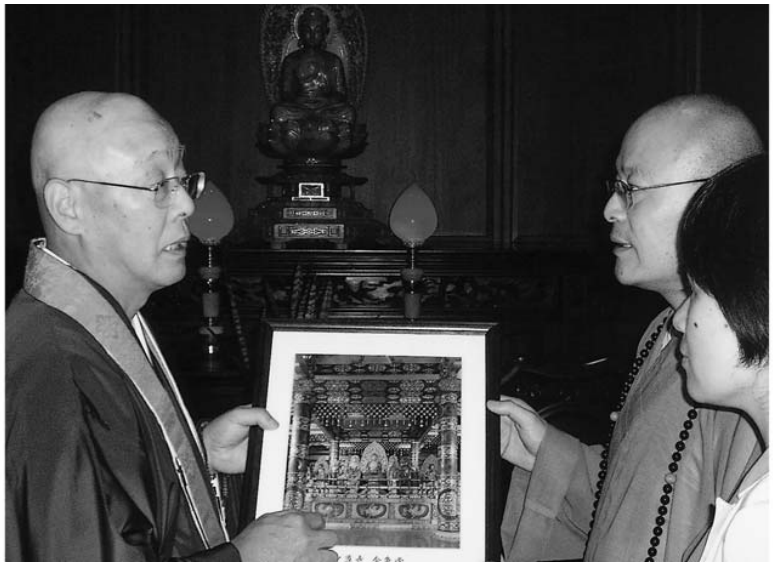
光泉法師（市仏教協会会長・霊隠寺監院）
聖憫法師・　王　嘉誠氏（杭州市宗教局）

などと挨拶を交わす。ここでも、趙僕初先生の遺志が受け継がれていて、遺骨収拾当初からの長い絆が実感された。

門外に出て数分、先の方を歩いていた山田貫首が、なにか立ち停まっている。近づいて見ると、参詣者のなかに紛れて、一人の行者が貫首の脚元に額ずき「頭面摂足帰命礼」、五体投地している。

遥かに、山西省の聖地・五台山から行脚して今ここに至ったところ、まったく思いがけず紫衣の僧正に邂逅した。奇なる縁に感謝し礼拝させていただいているのだという。

その後はお決まりのコースで**西冷印社**に寄る。ある意味で最も中国らしいというか、金石篆刻を研究し技術を伝承する学術団体である。印刻注文承りで、筆者も法語を刻し



てもらうことにした。真面目そうな男の接客係さんに支払いも済ませたが、「上海のホテルに届けますヨ…」の一言だけで、引換書も、領収書もくれない。で、領収書は？と訊ねると、日本語で「大丈夫、信用して…」と、言われてしまった。

西冷印社を出て、一行は車の待つ方に向かったらしいが、それほど急ぐ必要もなかろうと、裏手の高台に登った。ちょっとした展望台になっている。一軒平屋の建物があって、標識を見ると「題襟館　又名　隠閑楼」とある。ガラス戸の中を覗くと書や印が陳列されていて、その奥の部屋ではなにか講義の最中。みな真剣に指導者の方を注視している。

「篆刻」の講義とのことで、西冷印社の授業であろうか。

蘇東坡が詩「湖上ニ飲ス」で、春秋の美女西施に譬えて「淡粧濃抹総ベテ相宜シ」と謳った西湖を眼前に、しばし佇む。

西の湖蘇堤に白き秋の風

杭州市、今夜は唯景大酒店（メトロパークホテル）泊。

十三日

朝、ホテルを発ち高速道路を天台山に向かう。途中、まず**峰山**（FUNSAN）道場に寄る。

以前、ここを訪れたのは1996年であった。

＊寺報『関山』第3号に掲載の拙稿「天台山断想」を引いて対照してみる。

・「中国で伝教大師の新たな聖地発見」の見出し。

五月八日付の『比叡山時報』一面の記事である。最澄和尚は、貞元二十年（八〇四）唐に渡って天台山に求法巡礼したあと、翌年二月までかかって台州臨海で仏典を求得書写し菩薩戒を受戒。それから越州に行って順暁阿闍梨から密教・三部三昧耶を付法されている。それが「鏡湖の東嶽、峰山道場」と記されているが何処かわからなかった。その峰山（フーシャン）道場の遺跡が特定された、というのである。越州府は現在の紹興である。折しも、我々の天台山参拝を前にしての情報で、「峰山まで行けないか」という話になった。

・紹興から東に三十キロ、中塘鎮（村）という所でバスを降りた。踏切をわたり二十分ほど歩いて其処に至る。「峰山」、山と言うより高台である。砂岩の急斜面を草や枝葉に掴まって登る。大きな巌塊は石仏の頭部である。顔面が欠損していて、傍らに螺髪の部分が転がったままになっている。

・現地踏査された関係者を別にすれば、皆さんが峰山団参の第一号です、とガイドの王氏に言われた。

高速インターから普通車道を一五分ほど走って停まった。途中にあった小学校も、黍畑も、泥濘（ぬかるみ）の道も、八年前に峰山に向かったときのあの風景はどこにも無かった。

パンフには「上虞（じょうぐ）市百官鎮梁（りょうこう）巷村峰山寺」と。

土地の案内人さんと、痩せ犬に迎えられて院子に進むと、堂内から念仏の甲高い声が聞こえる。地元の婦人たちが、いつもこうして集まって拝んでいるのだろう。堂の裏手に回って少し登ると、近年造立された堂に、あの、巌塊の石仏が奉られている。

「欽首残身的古老而神秘的石彫大佛、便是当年峰山道場

的見証、順暁風骨的化身」（注記に野本覚成氏の稿を修改とあり）

しかし、われわれが現前に見た石仏は、欠損していたはずの耳から肩も、コンクリートですっかり整形されていた。その面容には仏陀の尊厳とか、古老の気宇も、時代の雰囲気もなにも感じられるようなものではなかった。仕方ないか…正直それが八年ぶりに峰山遺跡に佇った私の感想である。もし、日本だったら、もう少しなんとか…とあれこれ思いながらバスに戻った。

十一時三〇分　**赤城山石城寺**参拝。

門前の様子はここも以前と全く変わっていた。

傳（デン）　実大和尚　赤城寺方丈

法（ホウ）　持（ジ）大師　監院

傳　因大師　知客

に迎えられて相互の挨拶。決まりきった、単なる表敬のようにも思われるけれども、傳方丈の話のなかで「仏教は形ではない。心でしょう…」など耳底にのこる言も。

辞して智者大師（智顗）霊塔にお参りすると、参詣講の

善男善女が声を和して称えながら、長い線香を捧持して塔を巡り、遶仏（にょうぶつ）・投地礼を繰りかえしていた。暫し、池の向こうに刻された「佛」「放生池」の文字に目を遣りながら寺域を出た。参道は大勢の参詣人や旅行者で混雑していた。

午後三時過ぎに　天台山　**国清講寺**参拝。

褐色の壁面に、あの象徴的な「隋代古刹」の墨蹟が見えた。聖地・天台山の南麓、天台仏教の拠点・コアゾーンである。山門から弥勒殿・雨花殿を礼し、大雄宝殿の右手、方丈楼に入った。

可（カ）明法師　国清寺方丈
克（カク）慧法師　首座（しゅそ）
月（ゲツ）浄（ジョウ）法師　副監院
宝　果法師　大知客

ほか、陳統江氏（県宗教局長）ら大勢のお歴々の方にお迎えいただいた。ことにも可明法師は中国天台の主格で、相当のご高齢と見うけられる。

予め、一紙認めていらしてお話しいただいた。

「塔映堂金色
国清寺中尊
台宗涌甘露
法乳誼千秋」

国清寺・中尊寺、ともに塔堂は金色に映え、台宗の法味、甘露涌き出て、永く交誼を。

辞句の意自ずから通ず、というところか。

境内には隋梅の大樹、また樹齢四〇〇年という香樟（くすの）の老木に足を停めた。

夕六時三〇分　晩餐に招待された。

克慧法師と並んで叶玲君（ヨウレイクン）女史が。以前、中尊寺に見えた折に名刺をいただいていた。あのころは宇都宮に住んでいて、国際児童交流支援のなにか役だった。席上あらためて紹介されると、あれ、「浙江省天台県人民政府副県長」の要職である。

彼女のご挨拶がまた、

山田俊和貫首はじめ、日本天台宗中尊寺のというより、平泉中尊寺の皆様をお迎えできて…。高橋一男町

長さんからは何度も電話がありました。千田孝信前貫首のお人柄も思われ、ここにいらっしゃいます菅原光中師はじめ、日本でいろいろお世話いただきましたことや、此処を訪れてこられる天台宗のお歴々にも…。話は多岐多彩に及んで、通訳がほとほと困惑の体であったが、我々には彼女の心意が通じた。

天台賓館泊。

十四日

八時出発。日程表には「専用車」とあったが、これはこれは。急カーブの登山路を大丈夫だろうかと些か不安な、というより、エンジンとブレーキを信じるしかない中古のマイクロバスである。先ず、**真覚寺（智者塔院）**に目指して走る。車窓の景観はこの地方の実情をリアルに見せつける。山に生れ、棲みついて生きている民は自給自足していくしかない。麓の村には大きな室が見えて、椎茸を栽培している。仰ぎ望む山々は石楠花の宝庫だという。しばらくして、バスを下りて人一人がようやく通れるほどの小道を辿った。

右手の方角が、修禅寺のあった銀地嶺になるのであろうか。

菩提子の実を拾ひてや智者塔院

読経の後、監院の克鋼法師に案内いただいた。智者塔院は、定恵真身塔院ともいわれるように、塔下に真身（智顗の御遺体）を埋納されたと伝えられている。塔高６ｍ。

宝蔵に石碑があり、急いで刻銘を読む。

「台州隋故智者大師修禅道場碑銘并序」

「唐元和□年十一月十二日　僧行満建」

＊唐憲宗の元和元年は、最澄が入唐求法して帰国した翌年から十五年。（八〇六～八二〇）碑は、文化大革命の際、隠蔽保存（隠蔵）されていた。

庭前には、金桂、銀桂が対になっている。

＊『隋天台智者大師別伝』に伝える、智顗が禅定の「降魔成道」の霊地、華頂峰（海抜１１３８ｍ）に、是非、登りたいという私どもの要望は、当初期待が

もてる反応を得ていたが、どうも現地と意思の疎通がなされていなかったらしい。そういう観測が昨夜あたりから囁かれていた。

かつて、実現しかかった五台山登拝が、太原まで行っていながら挫折した、一九八一年の中国仏教者訪中団の苦い体験が想い出された。あのときは軍部の了解が得られなかったとかの事情で、華北の仏跡踏査で我慢した。ようやく五台山登拝が実現したのは四年後のことであった。

またか、というより「まだ、そういう…」といった思いもするが、よその国内事情だから仕方ない。

しばらく下り坂を歩いてから、バスに乗った。

車でなら二十分もすれば至るであろうか。遥か彼方に、霊峰を見やりながらバスは下る。結局、中国の事情で華頂峰登拝は実現できなかった。

右に左に、大きく揺れる中古車。左手は千仞の峪である。後ろの席を振り向くと、熟睡していらっしゃる方が一名。さすが、スーパーウーマン！

十時　**高明講寺**を参拝。寺内に八〇名ほどの僧がいるらしい。法衣を着た信徒が堂内に満ちていた。

十一時　**華頂講寺**に詣でる。

この伽藍復興に至る経緯、可明法師のご尽力、日本天台宗の支援と落慶法要の予定で大勢来てみるとまだ工事半ばであった話など、当時、宗務庁に奉職し総務担当していた貫首から想い出話が。

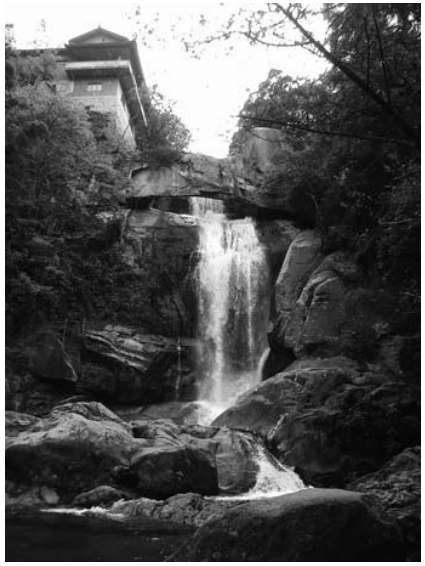
入口の所に、「止單」の標識板が目についた。訊ねると、「入門お断り」の札だという。現在修行中の衆僧のなかに、アメリカ人の僧がいた。

「ワタシ　日本ノ文化、大スキデス」と言って法星法師と名乗った。

山内の飯店で、昼食を済ませる。

「石梁飛瀑」（石橋）を回って身心清浄にし、**下方広寺**に入る。五百羅漢の発祥の地である。

月　真法師（監院）は、以前から山田貫首とは知己のあ



いだで、「書をよくされる方で、可明法師の書は、ほとんどこの月真師の染筆」とか。

月真師は、杭州市の永福寺も住持されている由である。滝が遠くに見えて、閑寂な場(にわ)である。

石梁の天に懸かれり山薊(やまあざみ)

西麓、**万年禅寺**は東晋の古刹である。

「名山復古刹金容荘厳触目皆是清浄土」。談林というか学院である。

＊ 現在、四二名が修学。止観道場は六六座。
机の数は、初級が三六名、上級二四名。
時間割は五時起床、夜九時四五分就寝まで。

国清寺の豊干(ブカン)橋に戻ったのは、夕暮れて「彼(か)は誰(た)そ」、まさに黄昏(たそがれ)になってからで、その暮色のなかで「**隋塔**」がことさら存在感を誇っていた。

＊ I SUI PACODA　六面　九層。高さ五九m。
印　通法師ら五名が終日同行してくれた。

十五日

九時、天台賓館を発つ。叶玲君副県長以下、ご当地の対応にあたった方々が、わざわざ見送りに来てくれていた。華頂峰のことを気にしているのがわかった。いずれ、いつかまた、「謝謝」

午後、寧波(ニンポー)に入る。反帝橋の辺を歩く。かつて遣唐使がこのあたりに発着したと伝えられる。貞元二十年（延暦二十三／八〇四）七月、最澄らを乗せた船もこの辺に打ち上げられたのであろうかと思いつつも、此処と特定はできなかった。

＊ 寧波空港で、時間を待ちながら、随行の張さんに看板の解説をしてもらった。
「和義大道　非常商業大道」
和義大道はビジネス・センターの名。
非常商業大道は、有名ブランドの意味と教えてくれた。

（16：30　上海着）

中国では現在、仏像製造が盛ん。
写真は、東大寺の大仏より数センチ高く、世界一に。

十六日

バスは玉仏寺に向かったが、高速道路に入るや、大渋滞に閉じ込められた。動きようのない車の中で、こちらの添乗員が早口で喋る。リニアモーターカーが側を猛スピードで通り抜けていった。なんと、時速４３１キロ。上海空港まで三分だと。あちらに見える森ビルは、一〇一階で４９２メートル。世界で二番…、と経済発展、高度成長を声高に語るけれども、われわれが乗っているバスはさっきから全然進まないのだ。あァーあ。

聞けば聞くほど、このままでこの国の経済大丈夫なのだろうか。かつて日本が体験したような、バブルが懸念されてくる。

私が中国に、たしか二度目（１９８５）、五台山への登拝が実現して帰国する便の機内で見た華紙に「日本泡沫経済崩壊」と。あの大きな活字が思い出される。泡沫経済？まだ、バブルなどという経済用語が一般には知らなかったときである。

当世、中国のひとも、来年の北京オリンピックと、その

翌々年に開催される上海万博までは、このまま大丈夫と思っているようだが、こう言う。「その先はわからないです」と。

第一日目の北京空港からずうっと同行してくれた中国旅行社総社日本部の張丹さんとは、上海空港で別れた。彼女は、日本語が巧いといったレベル以上に、日本人の言葉の間合いが読める。こういうひとは有り難い。（17：00　成田着）

色変へぬ松九十九里跨ぎけり

＊北京で開かれていた中国共産党第17回大会は二十一日、調和のとれた持続可能な発展を目指し閉幕した。その意義を日本の各紙が報じていた。

春の御神事

破石澄元

毎年五月四日と五日の両日は、中尊寺鎮守白山神社の祭礼である。「古実式三番」と能楽が中尊寺の衆徒によって奉納される。近年はこれに献饌行列と獅子舞が神社の氏子によって復活され、まつりの形が整ってきた。翌六日の山王講とともに「春の御神事」として、天下泰平・国家安穏を祈る中尊寺では最重要の法会のひとつである。ことにこの「古実式三番」と能楽は、仙台藩二代藩主伊達忠宗公の北方巡検以来、代々の藩主登山の折には上演しており、明治期には天皇陛下のご巡幸に際しても上覧に供している。

「春の御神事」について紹介したいのだが、先に中尊寺の衆徒の構成を簡単に紹介しておく。中尊寺では一山の後継者（子弟）は、十四歳で得度受戒する。そして十一月の「天台会」初出仕をもって法臈一年とし、以後二十一ヵ年の間の者を結衆という。結衆の間は法会の準備等、寺の諸事にわたって小僧役をつとめる。結衆の上席三名のものを三役院といい、そのなかでも最上席のものを役席という。この役席が一山の法会や祭礼をとりしきる。ちなみに、結衆のうち下から四人のものを下四人という。二十一ヵ年の結衆勤めを終えると、中老となり一人前の僧侶として認められる。また、一山の中で最上席三人を老分といい、それぞれ一老・二老・三老という。つまり一山衆徒の構成は、老分・中老・結衆ということになっている。また、座次はことごとく臈次によって決まるので、おおむね年齢順となるのが普通である。

さて、「春の御神事」について『関山中尊寺歳中行事』（仙台・仙岳院文書　天保三年）をかいつまんでみると、概略次のようなことである。

まず白山祭礼の冒頭に、「奉為天下泰平国家安全、太守公御武運長久、御息災延命、御領内静謐、万民快楽、奉祀御祈祷所也」とあり、まさしく大祈祷会である。白山社の祭礼に当たって、三月末の午の日から二・七ヵ日の間（十四日間）前行を行う。朝八時に大鐘を撞き一山が出仕する。結衆は毎朝白山社長床において田楽を舞う。八日目からは

開　口

祝　詞

若　女

内七日といい、結衆は朝と晩の二度田楽を舞う。丑の日と寅の日の両日は結衆のうち三役院の下のものが、式三番の役者に挨拶に回る。つまり開口・祝詞・若女・老女を演じる中老のものに、それぞれお勤めいただくようにお願いをする。また丑の日からは祭礼前日まで、結衆は朝五時から出仕し、田楽を奏し法楽として普門品・般若心経・諸真言を唱える。巳の日は祭礼前日に当たるが、試楽の晩といって、四智讃・諸天讃・普門品・般若心経・諸真言を唱え、さらに田楽・開口・祝詞・若女・老女と一通り舞い、あわせて装束等の確認を行う。午の日つまり祭礼初日は、一山惣衆は白山に参り、献供作法の後普門品・般若心経・諸真言を唱え、御本地供を修す。終わって一山惣衆は金色院に詰める。白山の庭上では、獅子舞が奉納される。獅子舞はさらに金堂前（今の金色堂の前あたり）でも舞われる。金堂前から獅子・神楽衆・田楽衆などが行列を組み、あらためて白山社に向かう。この時に、七歳の稚児を馬上に乗せた「お一つ馬」の行事も行われる。続いて長床において、神楽・田楽・開口・祝詞・若女・老女と進み、最後に喜多流の能が演じられる。二日目の未の日は田楽・開口・祝

老　女

詞・若女・老女と進み、やはり喜多流の能が演じられる。翌る申の日は山王堂で三問一答が行われる。講師は貫首が勤め、問者は下四人より上の結衆が勤める。終わると堂内でそのまま役席が「春の御神事首尾よく済ませ目出度く、またご苦労様でした」というような挨拶があり、祭は終わる。ちなみに若女面には正応四年（一二九一）の刻銘があり、遅くとも鎌倉時代から継承されてきた神事と思われる。もちろん能楽の成立はそれ以降のことであり、まして今のように喜多流の能楽になったのは、江戸後期のことではあるが、まつりの形としては鎌倉時代にさかのぼるものであったと思われる。

今日「春の御神事」は午・未・申の日を五月四・五・六日の三日間にあてて執行している。神楽・田楽、まして「お一つ馬」の行事は残念ながら廃絶しているが、献饌行列と獅子舞が復活し、さらに式三番と能が舞われている。ことに近年は、能を見る観客の目が厳しくなっており、諸役真剣にその稽古に励まなければならない。そのこと自体大変結構なことではあるが、ややもすると能楽偏重になり、本来の「ご神事」としての考え方が置き去りにされかねない。「式三番」の習礼にも一層重きを置いて、今日二日目に「開口」しか舞われていないが、「祝詞」「若女」「老女」も同じように演じられなければならない。

春の御神事は、天下泰平・国家安穏を祈る中尊寺では最重要の法会のひとつとして、伝承していかなければならない。

レポート

世界遺産石見銀山遺跡見学記

菅野澄円

平成十九年六月二十八日、石見銀山遺跡は世界文化遺産に正式登録された。事前に行われた国際記念物遺跡会議（イコモス）の調査報告では、普遍的価値の証明が不十分であることを理由に「石見銀山遺跡は登録延期が適当」と勧告されていた。日本が推薦した世界遺産候補に登録延期等の勧告をされたのはこれが初めてのことであり、各報道でも大きく取り上げられ、当然平泉の関係者にも衝撃を与えた。登録は厳しいと思われたが、その後の補足情報提出等の様々な活動により、世界遺産委員会では満場一致で正式登録となったのである。

今回の旅行の目的は、世界遺産直後に何が起こり、どのように対応すべきなのかを彼の地に学ぶことにある。

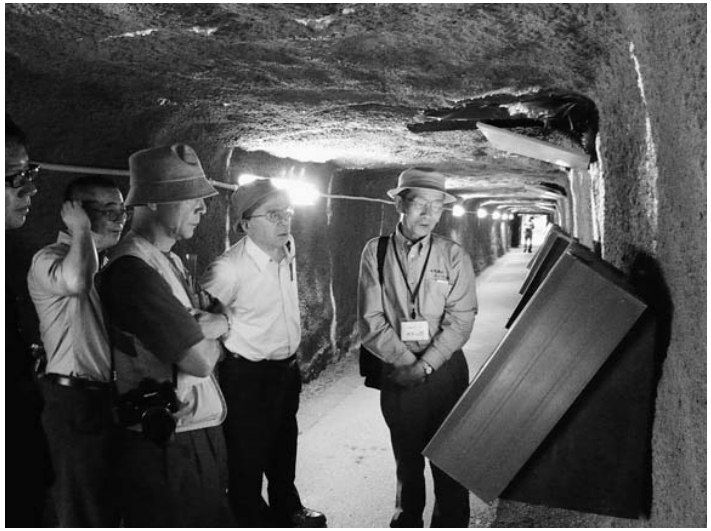
七月二十三日

東北新幹線で上京し羽田空港から出雲空港へ。岩手から島根への最短ルートはこれになる。出雲空港では、「石見銀山」「世界遺産」という言葉の露出が極めて少ないことに驚いた。また、観光案内所でも石見銀山関係の情報は少なく、説明も心許ないものだった。

もう一つの目的である出雲大社、出雲ドームといった新旧木造建築を見学し、出雲市内に宿泊。

七月二十四日

レンタカーにて石見銀山を目指す。途中の道路案内標識の整備状況を確かめながらの走行。しかし、大田市に入るまで「世界遺産石見銀山」への案内標識は無かった。午前九時、銀山公園に到着、地元ガイドの西本俊司さんと合流する。西本さんは当地の西本寺の御住職。丁寧に御案内いただくと共に、世界遺産登録までの苦労話、現在抱えている問題などについてもお話しいただいた。到着時には銀山公園の駐車場に空きがあり、駐車することができた。しかし、山間の小さな集落に、大型バスが何台も入ることも、



龍源寺間歩

乗用車が押しかけることも難しい。数キロ離れた場所に駐車場とレストハウスを建築中であった。駐車場の一部は完成しており、巡回バスがピストン輸送をしていた。基本は歩くことが求められ、谷間の往復のうちどちらかに巡回バスを利用する人が多いようである。西本さんによると巡回バスに乗りきれない場合が多くなっているとのことである。

江戸幕府の直轄地として銀を産出した石見銀山。その労働が過酷であったことは想像できたが、労働者とその家族が厚い福祉制度で守られていたことは世界に誇れると思った。龍源寺間歩（まぶ）は、一般公開されているだけあり、十分立って歩行することが出来るが、当時は匍匐（ほふく）前進の格好で小さな手燭をたよりに採掘が行われたそうである。

午後は、石見銀山の街並み地区を散策。熊谷家住宅等を見学した。江戸期の空気が残っているかのような佇（たたず）まいは、時間を忘れさせる。地域の方々が協力してこの街並みを維持しておられることが伝わってきた。しかし、様々な理由で人が住んでいない家屋もあり、課題も多いようである。

七月二十五日

出雲市の足立美術館等を見学し帰路につく。

世界遺産登録は、おおきな注目を集める。わざわざ旅をしてそこを訪れる人は、かなりの学習もしてくる。その人達に「来てよかった」と思ってもらえるかどうかは、結局はそこに住む人々の魅力に大きく依存する。今回の旅行後の心地よさは、石見銀山の魅力もさることながら、西本さんをはじめとする島根の人々の暖かさに他ならない。

石見銀山の課題は、そのまま平泉、中尊寺の課題として受け止め、努力し続けようと思う。

旅行参加者

菅野澄順　佐々木邦世　破石澄元　菅原光聴　菅野澄円

讃衡蔵館蔵品展

「帰ってきた金字経」開催報告

はじめに

平成十九年十月二十六日から同十一月十八日まで讃衡蔵企画展示室において館蔵品展「帰ってきた金字経」が開催された。

奥州藤原氏は親子三代にわたって金字の写経を発願し、多くの経典が中尊寺に納められた。これらを大別すると、初代清衡公による「紺紙金銀字交書一切経」、二代基衡公と三代秀衡公による「紺紙金字法華経」、三代秀衡公による「紺紙金字一切経」となる。特に紺紙に金字と銀字を一行ごとに写経した紺紙金銀字交書一切経は国内未曾有のもので、日本装飾経史上の白眉と称されている。

しかし、紺紙金銀字交書一切経の大半は近世初頭に持ち出され、四千三百巻ほどが「中尊寺経」として高野山金剛峯寺の所蔵となっているほか、市井に散逸して伝えられているものも少なくない。現在、中尊寺にはわずか十五巻が遺存している。一方、紺紙金字一切経については二千七百二十四巻が寺に伝えられている。

今回の館蔵品展では近年になって還蔵された経典十五巻（紺紙金銀字交書一切経十一巻・紺紙金字一切経四巻）を一堂に展観することによって還蔵の仏縁を祝うとともに、金銀和光の経文や、釈迦の説法とそれを取り巻く脇侍・聴聞衆を描いた見返絵、浄土に咲く宝相華唐草をあしらった表紙絵等に込められた、奥州藤原氏の浄土信仰を間近に感じてもらうことに努めた。

また、中尊寺で現在も行われている「法華経一日頓写経会」や「如法写経十種供養会」（写経奉納式）の際に奉納された現代の書家の手になる金字経も参考出品し、「写経の寺」の寺風が現在にも受け継がれていることを紹介した。

会期中は菊まつりや紅葉のシーズンとも重なって約10万人の参拝客の方々に本展を見学していただいた。また十月二十七日には中尊寺仏教文化研究所主任の破石澄元師、十一月十日には同所長の佐々木邦世師による展示解説会が開催され、藤原氏の写経作善や経典にまつわる説明に、訪れた大勢の参拝客や地元見学客の方々は真剣なまなざしで展示に見入っていた。

展示資料リスト

〔紺紙金銀字交書一切経〕

荘厳劫千佛名経　巻上／賢劫経　巻第六／伽耶山頂経／佛説諸法無行経　巻下／大般若波羅蜜多経　巻第七十七／大般若波羅蜜多経　巻第七十／大般若波羅蜜多経　巻第一百五十四／大般若波羅蜜多経　巻第三百七十八／轉法輪経憂波提舎一巻／方便心論経一巻／不空羂索神変變真言経　巻第二十八

〔紺紙金字一切経〕

大般若波羅蜜多経　巻第五百五十六／妙法蓮華経　巻第一／大般若波羅蜜多経　巻第五百一十四／大般若波羅蜜多経　巻四百五十九

〔参考出品〕

紙本墨書中尊寺建立供養願文（輔方本）〔重文〕／宋版一切経／植村和堂師奉納　紺紙金字法華経（五百弟子受記品・法師功徳品／新倉禾亭師奉納　紺紙金銀字交書法華経（如来寿量品）

（菅原　光聴）

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

こんな一年でした

佐々木　典子

今年は、これまでになく舞台発表の機会に恵まれた一年でした。

四月には、高野山にて金剛流の大会が行われました。交流奉詠舞に招かれ、叡山流から中尊寺・毛越寺支部が参加。和讃二曲、詠舞一曲を披露しました。緊張のせいか十分に力を発揮できなかったように思われ、悔やまれました。時間の都合で、寺院の参拝はあまりできませんでしたが、奥の院の、歴史を感じさせる杉の大木や、苔むした由緒あるお墓の数々には驚きました。

舞台発表のあとは、日本三美人の湯で知られる龍神温泉に宿泊し、翌日、道成寺を参拝。安珍と清姫の『道成寺縁起絵巻』の写本を繰りながら、アドリブの効いた興味深い解説を聞かせていただき、しばし笑ってしまいました。

六月、「慈覚大師円仁とその名宝展」が東北歴史博物館で開かれ、開会の式典で讃仰和讃を二部合唱でお唱えしました。ドーム形のホールの屋根に歌声が反響し、思わぬ好評をいただきました。

十月、叡山流西日本奉詠舞大会が、佐賀県武雄市で開かれ、三泊四日の旅をしてまいりました。

中尊寺・毛越寺支部は、昨年の東日本大会に「平和観音和讃」の舞踊で、最優秀賞をいただきました。お蔭で、今年の西日本大会に招かれたものです。

一日目は、太宰府天満宮、観世音寺を参拝。天満宮の賑わいや楠の巨木、門前のお店を楽しみ、観世音寺では数々のお仏様と対面することができました。

二日目は大会当日です。西日本のチームの発表を拝見し、私達の出番は午後。水を打ったような観客席を前に、何とか無事に発表を終え、大きな拍手をいただきました。

三日目、雲仙温泉を発ち、普賢岳の火砕流現場の痛ましい爪痕を見た後、フェリーで熊本へ渡り、阿蘇山の広大さを豪華なバスの窓から体感しました。

そして四日目、日田市豆田町のお土産店めぐりを楽しみ

帰途につきました。

九州の旅は、温泉を満喫する旅でもありました。東北に比べ、空気や陽光も異なる感じがします。

また、バスのガイドさんがたいへんな名人で、皆すっかりファンになってしまいました。

〝九州はよかとこね～。

木庭民代さん、またお会いしたか～〟

十一月には、梅花流岩手県奉詠大会に招かれ、唱詠四曲、詠舞一曲を披露しました。

今年度は、このように充実した活動となりました。

参加された会員の皆さん、お疲れ様でした。

陸奥本部のご協力にも、感謝申し上げます。

一山のご住職がたによる、年中恒例の法要への、私ども福聚教会の参加も二十回を数えます。稽古不足で自信のないお唱えだったり、参加者が少なくて、盛り上がりに欠けることもありました。高齢化にもなりつつあります。

これらをふまえ、来年度もさらに元気にありたいと思います。

（円乗院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）

伝承の現在

破石晋照

平成十九年十月、落ち葉の散り始めた東京の能舞台で、『止動方角（しどうほうかく）』という狂言の〝馬〟の役柄を演ずる機会があった。もう何度も演じさせて頂いた役であるが、この役を演ずるときは、いつも非常に神経を使う。私にとっては〝大役〟の一つである。

演目のあらすじは、主人が茶くらべに持って行くためのお茶と乗って行く馬とを太郎冠者に借りに行かせる。しかし、太郎冠者が借りてきた馬には一つおかしな癖があり、背後ですわぶき（咳）をすると暴れだし、乗っている者を振り落としてしまう。それを沈めるための呪文も教わり、太郎冠者は主人の元へと意気揚々と帰って行くのだが、帰りが遅いと迎えに来た主人は馬を奪い乗り、その馬上から太郎冠者を叱り付ける。腹を立てた太郎冠者は、主人の乗っている馬の後ろでわざとすわぶきをして馬を暴れさせ、主人を落馬させる。二度と馬に乗りたくないと言う主人の代わりに太郎冠者が馬に乗り、いつしか自分が偉くなったときの為、主人を召使いに見立てて人を叱る稽古がしたいと言い出し、今度は太郎冠者が馬上から自分の主人を叱り付け返す。我慢できなくなった主人は、もう一度太郎冠者から馬を取り返して自分が乗るが、太郎冠者はまたしてもわざと馬の背後ですわぶきをして主人は落馬し、馬は逃げて行ってしまう。

舞台上での馬というと一等先に思い浮かべるのは、歌舞伎の舞台に登場する前足役と後ろ足役とが分かれて二人で一頭を演じる馬であると思うが、狂言に登場する馬は役者が四つ這いになり、一人で一頭の馬を演じる。狂言役者は人間以外にも、猿・狐・牛に始まり蚊や蟹までも演ずるのだが、その中でもこの止動方角の馬は中々の重労働である。

舞台に登場してからは、右手と左足、左手と右足を交互に動かしながらパカポコと歩き、乗り役の人間が「ハイッ、ハイッ」と掛け声を掛けたら、大きな声で「ヒヒーン」と馬の鳴き声を出す。乗り役は実際に馬の背中にまたがるの

ではなくて、馬の後ろに立ち手綱を握って歩を進め、乗り役が右の足を上げると馬の方は右足と左手、また乗り役が左足を上げたときにはその逆という様に乗り役と馬と連動して歩を進め、実際に馬に乗っているかのように見せるのだが、これがなかなか難しい。

三間四面の能舞台の上を、単純に一直線に進むのではなく、円を描くように進むこともあり、またピタリと止まることもある。自分の手綱を持っている師匠の呼吸を感じ、間合いを感じ、乗り手と馬が完全に連動した時に初めて、どこから見ても隙の無い様式美に支配された能舞台というものが出来上がるのである。

狂言の稽古では、台詞の言い方、所作の仕方を師匠から一対一で教わってゆく。それと同時に弟子は師匠の呼吸や間合、舞台における癖や美意識までをも学び取り、完全なる師匠のコピーとなるよう稽古してゆく。そういった目に見えない部分が学べているかどうか、このような役を演じる時にはあからさまに試されるのである。

芸能に限ったことではなく、古くから受け継がれてきた様々な日本の伝統は、技術の伝承のみをその目的としてきたわけではない。継承者は師から技のみならず、その技を継承する人間に必要不可欠な精神性をも継承してきた。その精神性は時として継承者の生活を律し、行動や思想を規制するような大きなものであった。だからこそ継承者はその技を畏れ敬い、守ってくることができたのである。そしてそこに生まれた精神性はいつしか日本人の精神となり、この国を支える精神性となった。

目に見える表面的な技の伝承にのみ目を奪われ、受け継がれるはずの精神を喪失し、表面的な技が一人歩きしてしまったとき。せっかくの技はやがて継承者を失い、或いは技自体がその輝きを失い、消滅を余儀なくされてしまうであろう。我々は先達が畏れ、敬い、大切に伝承してきた技と、それを裏付ける精神を着実に伝承し、未来へと伝えてゆかなければならない。それこそがこれから先、我々が世界に誇ることのできる日本人の精神性となり、この国を支える礎となってゆくのではないだろうか。

中尊寺研修旅行

「世界遺産白神山地トレッキング」

鈴木陽子

感動！白神山地のブナ林で、
地球の青さを思う研修旅行でした。

七月十日、梅雨の最中の快晴。昨夜宿泊した青森県鰺ヶ沢温泉を七時半に出発。中尊寺職員旅行一行を乗せたバスは新緑の白神山地へと向かって行く。秋田県藤里町から入山し、白神山地現地ガイドの鎌田孝一さんの案内で、マイクロバス一台ギリギリの道幅しかない幾重にも曲がる林道を登る。脇を流れる川を見下ろそうとすると、恐い思いをしてしまう。

上り口の駐車場に到着後、お昼ご飯のおにぎり弁当をいただき、いよいよ歩き始める。

はじめは田苗代湿原へ、石坂を登りガサガサと枝や葉っぱを掻き分けてゆくと、湿原が広がる。

トキソウ、モミジカラマツ、ミツガシワ、オニシモツケ、ツルアジサイ、ユズリハ、クロモジ、シナノキ、ナナカマド等々、咲きはじめの花、咲いている花、終わりかけている花、青々とした樹や葉っぱ、高山植物は、その過酷な環境の中で力強く成長し、それぞれに命の美しさ、尊さを感じる。

ガイドの鎌田さんは、わかりやすくユーモアをもって説明してくださる。どの花も樹も、名前と一致しているようで面白い。花も樹も好きな私にとっては、名前だけ知っていた花や樹、初めて知る花や樹が目の前にあり、手で触れることができたのは、とても楽しいことであった。

次は再びバスに乗り、岳岱自然観察教育林へ。

ここはブナの原生林。

トキソウ

生い茂る樹木は三百年から四百年の樹齢だという。ブナの原生林は、歩くとフワフワする。鬱蒼としているのに、清浄さを感じる原生林はどこか神秘的であり、また心地よさと懐かしさをも感じさせてくれる。

ブナは大きい。両手ではまわしきれないし、見上げてもどこまで高いのか計り知れない。（樹高は二十五メートル位、幹の太さは一・五メートル以上という）

ブナの下にはシダがいっぱいに茂っており、このシダを見ただけでブナ林の具合がわかるそうだ。ブナが無くなるとシダは生えず、笹に代わってしまうという。同じように、ブナ林に湿度があるかどうかも岩を見ればわかるという。湿度があれば苔があり、そこには植物がびっしりあるという。現にここの約一メートル四方の岩の上には苔があり、そこでは、アシタバ、ツルリンドウ、ツクバネソウ、ツタウルシ、ノリウツギ、ハリギリなどが活き活きとしていた。

ブナが保有する水は、二百年の樹齢の場合、八トンにもなり、一アールの田んぼを潤すという。ブナは水をその根本に蓄えてくれるが、杉は蓄えることなく、葉から水を発散させてしまう。

しかし、ブナが伐採されると、沢にたっぷり流れていた水がチョロチョロと少なくなり、川まで枯れてしまう。戦時中には、軍用機のプロペラを作るために、ブナ林が伐採され、また戦後も再生が難しくなるほど伐採された。ブナ林が再生されるには、気の遠くなるような年月が必要になる。

ブナ林を進みながら、ガイドの鎌田さんの話を聞くにつれ、ブナ林がどんなに大事かと言うことが伝わってくる。渇水や洪水を抑制し、土砂崩れや雪崩を防止し、二酸化炭素を酸素にし、蝶や鳥や熊も棲む山地こそが人間にとって一番いい環境となる。ましてや、戦争でブナ林を伐採するなどあってはならないのである。

ガイドの鎌田さんは、かつて白神山地にあった鉱山で仕事をしていたので、白神山地を知り尽くしていた。今では白神山地を守るために、行政に掛け合うなど、ブナの原生林を守るために様々な活動をしている。心底、白神山地を守っていこうとする彼の熱意に頭が下がるばかりであった。ガイド協会では料金の一部を提供して、山に人が入って植物を傷つけないようロープを買うなど、山を守り続けている。このような人々の尽力で途方もなく大きなブナの

原生林が守られていることにも感動した。

帰り道では、白神山地の原生ブナの素晴らしさを思いながら、私たちの住む青い地球が思い浮かんだ。青い色は水である。ブナ林から滾々と湧き出る透き通った水は、里を潤し、豊かな川となって大海へと注ぐ。その水が地球の青さであり、私たちの命を支える豊かな水の根源である。

ブナ林で青い地球を思い、感動で胸がいっぱいであった。ブナ林が守られてほしい。もっと広がってほしい、と思う。

素晴らしい感動と出会いをありがとうございました。

（中尊寺職員）

日次	月日	時間	
1	七月九日	07：30	第一駐車場集合
		10：00	バスにて平泉前沢ＩＣより大鰐ＩＣへ 岩木山神社到着
		10：50	参拝後ロープウェーにて岩木山山頂へ 岩木山山頂
		11：30	岩木山出発
		13：00	金木観光物産館着 昼食をとり斜陽館見学
		14：30	斜陽館出発
		15：00	十三湖七平展望台着　散策
		17：00	ホテル到着
2	七月十日	07：30	ホテル発
		10：30	藤里町世界遺産ビジターセンター着 白神山地の現地ガイド、鎌田※さんと合流し、トレッキングへ
		15：30	昼食は白神山地でお弁当を食べる 白神山地出発
		19：00	能代ＩＣより平泉前沢ＩＣへ 中尊寺到着

※ 鎌田孝一さんは、白神山地の巡視員の方で、白神山地の観光案内もしていらっしゃいます。

仏教史特講レポート

大正大学３年　木村安希子

「平泉における浄土思想の展開」

敗者泰衡への視点

「中尊寺建立供養願文」に曰く。「令三冤霊導二浄利一矣」（冤霊（えんれい）をして浄利に導かしめん）。戦死者の霊を、敵味方の区別なく供養する。平泉の礎となった初代清衡の願いである。

平泉を、みちのくを「仏国土」にという清衡の精神は、後の二代基衡、三代秀衡へと受け継がれながら、都市としては、その政治性を次第に強めてゆき、秀衡の治世において、鎌倉に先がける中世都市への発展とともにその成熟期を迎える。

だが平泉は、秀衡病没のわずか二年後、全国制覇をねらう鎌倉の奥州征討によって、支配者であった「奥の御館」藤原氏が滅び、鎌倉幕府の保護下に置かれた。

四代泰衡が平泉を治めたその二年間は、「四代泰衡の時代」ではなく、「藤原氏滅亡の時代」として常に語られてきた。泰衡という存在は、今もなお、奥州藤原三代の枠外に位置するかのようにみなされている印象さえ受ける。

しかし、その泰衡の視点に立ってみた平泉には、三代にわたって連綿と伝えられてきた「浄仏国土」の思想が継承されている。清衡が願ってやまなかった理想としての「仏国土」平泉を、最も近い形で構想・実践したのが泰衡であったともいえるのではないだろうか。藤原氏滅亡へとつづく泰衡の選択には、清衡と共通する平泉＝浄土のあり方が見てとれるように思う。

『吾妻鏡』文治三年十月二十九日条、秀衡の遺言には、義経を大将として、国政をなせとの旨が記されている。これは、鎌倉との戦を想定した処置ではなかったろうか。

しかし、新たな棟梁泰衡は、結果的にこれにそむくことになる。奥州に攻め入った鎌倉に対し、平泉方は阿津賀志山で一戦を交えたほかはほとんど抵抗を見せず、平泉はたちまち鎌倉の抑えるところとなった。このことは泰衡の弱気や、統率力のなさを示すものとしてネガティヴに解釈されることが多かった。あたかも無能の将泰衡のもと、戦わずして無念にも敗北したと言う認識である。

しかしこれを、勝者の側で編述された記録から、ただ「敗戦」という事実だけでは、その深意を見落とすことになるのではないだろうか。ここで、見つめるべきは「敗戦」と言う事実だけではなく、鎌倉軍に攻め入られながら、その奥州の土地が戦場にならなかったと言う真実である。

泰衡にとってなすべきは、一致団結して鎌倉と戦うことではなく、その土地と民を守ることであったに違いない。これは、前九年・後三年の合戦の後、奥州を治める身となった清衡が、戦のための砦ではなく、信仰の寺院を作った精神の正当な継承であり、戦に身をおかざるを得なかった清衡が願った「非戦」の実践に他ならない。

治承四年、南都を攻めた平重衡によって（本人の意図するとしないとにかかわらず）灰燼に帰した東大寺や興福寺を思い起こすまでもなく、戦による被害は、その土地と住む民が被るものである。奥州藤原氏亡き後、平泉に新たな権力や政権が花開くことはなかったが、一農村への道を歩んだその土地には度重なる伽藍の焼失や、明治政府による廃仏毀釈にもかかわらず、風土に息づいた地元の民の信仰が絶えることはなかった。

清衡と泰衡、二人の生涯には深い悲しみがある。前者は平泉に至るまでの、後者は平泉を手放す悲しみである。「慈悲」と言う言葉の「悲」とは、心に「慈しみ」を実らす種子のようなものではないだろうか。彼らが平泉に対して同じ浄土を願ったことは、そう思ってみれば当然のことといえるかもしれない。

平成十年、泰衡の首桶から出た蓮の種子の初の開花について、「泰衡公が往生できたと痛切に感じた」とは中尊寺前貫首千田孝信師のことばである。それはあたかも、風土に根づいた信仰のあかしのように思われるのである。

〈了〉

風信 / 語録

〈中尊寺を訪れて〉

（６月の郵便受から）

中尊寺では、いろいろ心配りをしていただき、ありがとうございました。

本堂における座禅体験は初めてだったのですが二十分くらいの時間でも、とても長く感じました。

「人は、時間の中で生きている」と言う言葉の意味がよくわかりました。

今後は、この研修で得たことをもとに、より質の高いものを求め、学習していきたいと思います。

函館市立光成中学校
岩田　凌

中尊寺では、細やかなところまで配りょしていただき、心より感謝申し上げます。

私は、座禅を初めてやりました。テレビでは見たことがありましたが、実際はすごく痛いと思っていました。しかし、やってみると本当は痛くありませんでした。

お尚さんが言った「周りの音を聞きなさい」っていう言葉は、すごく心に残っています。

家に帰ってから、何も気づかなかった音や人の話を聞くようになりました。私は、何も考えていないことをお尚さんは教えてくれました。

これからも、周りの音を聞いていきたいと思います。本当にお尚さん、心に残る言葉をありがとうございます。

座禅の時は、よそみをした人もいたそうですが、本当はすごく緊張していたと思います。終わった後のほっとした感じが忘れられません。

本当に良い思い出をありがとうございました。

函館市立光成中学校
山口絵梨

……

岩手県下閉伊郡岩泉町浅内小学校
５・６年生より

座禅をした時に、長い時間はむずかしいなっと思いました。けどやっぱり足がしびれてたいへんでした。でも家で１、２回やってむずかしかったけど風の音が聞こえてきて、楽しかったです。

また、おちつかない時に家でもやってみたいとおもいます。

５年　鈴口智子

教えてくださったおかげで、座禅のことやおきょうのことについて勉強することができました。ぼくは、やっていて、やったことがあってなれていたけれどすごく足がしびれてしまいました。

これからも家などで座禅をやったりおきょうの練習もしてみたいです。

６年　佐藤大二郎

初めてざぜん体験をして、ざぜんは、とても足がしびれて大変でしたし、ざぜんがこんなにつらいとは、思っていませんでした。

また、中尊寺に行けたら、ざぜん体験をしたいと思います。

５年　田鎖誠太

座禅ではどのようなことをするかをくわしく教えてもらい、とても分かりやすかったです。

家でも座禅をやってみたいと思います。

６年　小泉拓海

座禅をした時、足がしびれて来て大変だったけどがんばることができました。座禅は、集中して、１から１００までかぞえることがとても大切なんだなぁと思いました。ぜひ家でもやりたいと思います。ありがとうございました。

５年　馬場美咲

座禅は、たたかれるのは、痛くなかったけど、足がしびれて大変でした。でも集中してしっかりやることができました。

これからは、空いている時間に座禅をやってみたいと思います。

６年　中澤裕真

研究／出版

平成十九年一月～十二月

〔出版〕

『毛越寺の古文書』（毛越寺）　佐島直三郎

『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』（歴史春秋社）　入間田宣夫

『王の記憶―王権と都市―』（新人物往来社）　五味文彦

『平泉・衣川と京・福原』入間田宣夫編　高志書院

「西の福原と北の衣川・平泉」　髙橋昌明

「義経・基成と衣川」　保立道久

「平泉藤原氏・源義経研究の新しい動向」　七海雅人

「衣川遺跡群の発掘・調査」　羽柴直人

「長者ヶ原廃寺跡」　鹿野里絵

「伝説と伝承の衣川」　石崎高臣

「白鳥舘遺跡とその周辺」　及川真紀

「柳之御所遺跡調査の現段階」　西澤正晴

「都市衣川・平泉と北方世界」　斉藤利男

「平泉都市構造の再検討」　菅野成寛

「「寺塔已下注文」の新解釈をめぐって」　柳原敏昭

「衣河館と平泉館」　入間田宣夫

『アジア遊学―特集 東アジアの平泉―』102号　勉誠出版

「平泉研究の現在」　菅野文夫

「「平泉」の古層」　佐藤嘉広

「平泉余話 その民俗を知る手がかりとして」　千葉信胤

「平泉の文学」　志村有弘

「世界遺産としての「平泉」」　阿部勝則

「柳之御所遺跡の概要」　斎藤邦雄

「宋代明州と日本平泉の友好往来」　林士民（藪敏裕訳）

「「入唐三度」重源上人と平泉―平安末期の東アジアと奥州」　保立道久

「平泉藤原氏による建寺・造仏の国際的意義」　入間田宣夫

「平泉は「世界遺産」たりうるか？ 石見銀山の教訓から」　小島毅

「東アジアの平泉」　八重樫忠郎

「中世都市平泉に生きた人々」　岡陽一郎

「中尊寺「宋版一切経」の舶載」　菅野成寛

「金色堂《御遺体》と浄土都市の思想」　中村一基

「平泉の世界遺産登録と地域社会の対応」　脇田健一

「奇祭としての哭きまつり」　木村直弘

「中国文化の日本への窓口―寧波」　張正軍

「寧波と海上シルクロード」　楊建華

『平泉文化研究年報』第7号　岩手県教育委員会

「平泉文化と北方交易1　―北奥出土ガラス玉―」　関根達人
「「聖地」平泉　―清衡の平泉創造―」　前川佳代
「中世平泉の市街地形成　―中世平泉前史の建物立地との比較―」　磯野　綾
「12世紀柳之御所遺跡における掘立柱建物の研究」　鳥山愛子
「柳之御所遺跡の検討（中間報告その3）―史跡整備計画との関わりを中心に―
付）平泉文化研究（柳之御所遺跡）関連文献目録　その1
柳之御所遺跡ほか平泉遺跡群出土木製遺物年輪年代測定結果について」　柳之御所遺跡調査事務所

『「都市平泉」CG復元論集』　「都市平泉」CG復元論集制作会

「CG「甦る都市平泉」制作における儀礼と荘厳の復元」　菅野成寛
「平泉の建築を復元する―その考証と課題―」　冨島義幸
「中尊寺に関する検討」　北嶺澄照
「経埋ムベキ山―平泉文化圏における経塚造営場所の考察―」　羽柴直人
「『人々給絹日記』を読み直す―柳之御所の復元のために―」　大石直正

週刊〔朝日ビジュアルシリーズ〕仏教新発見15　中尊寺　朝日新聞社

「空前絶後の仏教都市はいかにしてつくられたか」　斉藤利男
「金色堂の真の目的は平泉の守護にあった」　清水　擴
「「奥の細道」松尾芭蕉と平泉に魅せられた文人たち」　佐々木邦世

「宝物観賞・平泉の地に宿る至宝の数々に見入る」　長岡龍作・有賀祥隆
「一言法話「人中の尊」―お互いの尊いものを認めあう」　山田俊和

〔論文〕

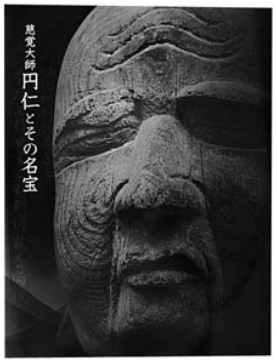
「系図の裏面にさぐる中世武士団の成立過程」　『中世武家系図の史料論』上巻　入間田宣夫　高志書院
「田河氏と奥州藤原氏」　『御館の時代』　山口博之　高志書院
「奥州合戦」　『吾妻鏡事典』　大石直正　東京堂出版
「伝「中尊寺落慶供養願文」再考」　『六軒丁中世史研究』12号　目時和哉　東北学院大学中世史研究会

〔論文集〕

大正大学綜合仏教文化研究所業書17巻――『仏教の人間観』　代表　近藤恵市　北樹出版

〔図録〕

「慈覚大師円仁とその名宝」　栃木県立博物館編



〔関山句嚢〕

（平成十九年六月二十九日　於毛越寺）

〈第四十六回　平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（席題）

花あやめふと秀衡といふ御方　（大会長賞）
・星野椿選　特選　一　関　村上　達男

開山堂蜘蛛が囲を張る礎石かな　（毛越寺賞）
特選　北　上　吉田　孝子

光堂奥に千年夏椿　（岩手日報社賞）
特選　平　泉　旭　光

長き夢覚めて中尊蓮咲けり
秀逸　平　泉　鈴木多佳子

睡蓮の眠りかけたる水動く
秀逸　花　巻　後藤　冴子

梅雨深しひかりを湛（たた）ふ仏たち
秀逸　北　上　及川由美子

世界遺産待つ青梅雨の平泉
秀逸　盛　岡　菊池　節子

あをあをと五月雨山を打ちにけり
秀逸　花　巻　白石　順子

むらさきの雨の糸ひく花菖蒲
佳作　奥　州　梅森　サタ

雨にいろ浮かせ浄土の花あやめ
佳作　奥　州　佐々木秀子

あやめ田の景を深めし鐘一打
佳作　一　関　佐藤喜佐子

万緑や千年杉の香り立つ
佳作　宮　城　佐藤　みね

夏足袋の小はぜひかりて僧歩む
佳作　大　崎　砂金　元子

束稲山（たばしねやま）は寝釈迦の姿青田風　（毛越寺貫主賞）
・小原啄葉選　特選　奥　州　鈴木　秀悦

興亡の地を擦り歩く梅雨の蝶　（中尊寺賞）
特選　一　戸　犬股百合子

ステッカーの世界遺産や虹の中　（岩手日報社賞）
特選　一　関　大津　六朗

三衡の森の闇より木葉木菟　（中尊寺貫首賞）
・佐治英子選　特選　平　泉　岩渕　洋子

遣水のそれより清く咲くあやめ　（平泉観光協会長賞）
特選　花　巻　中村　青路

あやめ園傘傾けてすれ違ふ　（河北新報社賞）
特選　奥　州　佐藤　瑞穂

なほ奥へ水音のあり菖蒲園
秀逸　奥　州　及川　忠子

遣水に浄土の匂ひ花菖蒲
秀逸　奥　州　佐々木美智子

五月雨の中にまみへし翁の碑
秀逸　一　関　小野寺　亨

蓮ひらく秘仏の乳房あかりとも　（岩手県知事賞）
・戸塚時不知選　特選　奥　州　岩渕　正力

白あやめ雨に照るとも翳るとも　（平泉観光協会長賞）
特選　北　上　菅原　典子

毛越寺初めて借りる梅雨の傘　（河北新報社賞）
特選　花　巻　佐藤　豊子

五月雨の音速めたり毛越寺　（岩手県議会議長賞）
・菅原多つを選　特選　北　上　畠山えつ子

降り出しの雨に香のたつ花あやめ　（平泉観光協会長賞）
特選　北　上　伊藤ふみ子

高館の雨に烟れり花あやめ　（岩手日日新聞社賞）
特選　北　上　菊池　郁子

龍頭の舟を池心にさみだるる　（平泉文化会議所理事長賞）
・小林輝子選　特選　北　上　松田　洋子

千年の寺の床踏む素足かな　（平泉観光協会長賞）
特選　奥　州　鈴木　秀悦

苔踏みて奥のあやめに近づけり　（岩手日日新聞社賞）
特選　盛　岡　草花　一泉

あやめ園ぼんやり松の濡れてをり　（平泉町教育長賞）
・小菅白藤選　特選　花　巻　市野川　隆

遣水の流れ早まり梅雨に入る　（平泉観光協会長賞）
特選　奥　州　及川　秀士

荒梅雨や笠かたむけて芭蕉像
秀逸　奥　州　梅森　サタ

（兼題）

開け放つ本堂の奥春の闇
・星野椿選（天）一　関　小山　武三

芍薬の芽の出揃ひし今朝の雨
（地）東　京　林　美登子

おぼろ月高く上がりて義経忌
（人）花　巻　後藤　冴子

囀や弁慶果てし衣川
（秀逸）一　関　菅原　良江

冴返る弁慶堂の石畳
（秀逸）平　泉　岩渕　洋子

平泉一語に勝る五月かな
（秀逸）紫　波　藤尾　艶子

その時を違ふことなき古代蓮
（秀逸）一　関　伊勢田あきを

熊野路の残る秀衡桜かな
（秀逸）盛　岡　木村　燿子

菊根分日がな知足の余生なる
・小原啄葉選（天）奥　州　及川　良治

玄米の甘さ昭和の日なりけり
（地）盛　岡　加藤久仁子

鶯や切字を巧く使ひをり
（人）一　戸　犬股百合子

連山に夕日とどめて麦の秋
（秀逸）気仙沼　吉田　貞子

伊達なまり南部なまりや農具市
（秀逸）北　上　及川由美子

ひそと咲く都忘れや義経堂
・佐治英子選（天）盛　岡　佐藤　義行

田を植ゑて夕日の水を満しけり
（地）佐　倉　小池　成功

束稲山へひとすぢの雲初桜
（人）北　上　吉田　孝子

古戦場跡に飛びかう蛍かな
（秀逸）大　崎　男澤　榮男

朧夜や持ちかへて鳴る鍵の束
・戸塚時不知選（天）北　上　山田　充子

毛越寺まはりの春田打たれけり
（地）北　上　菊地　民

春耕のはじめの小石拾ひけり
（人）奥　州　小野田キヨ

土産屋の旗の水色夏兆す
・菅原多つを選（天）気仙沼　吉田　貞子

玄米の甘さ昭和の日なりけり
（地）盛　岡　加藤久仁子

流し雛着くづれぬまま遠ざかる
（人）鴨　川　海老根まさる

束稲山へ雲ふくれつつ花林檎
（秀逸）北　上　吉田　孝子

光堂にて終りけり花の旅
・小林輝子選（天）奥　州　菊地　正治

落椿蒼天見つつ掃かれけり
（秀逸）美　里　佐藤　みね

花冷えの大座布団に僧沈む
・小菅白藤選（天）北　上　下田　榮一

ものの芽や胎内佛は一木彫り
（地）千　葉　安彦　四郎

甚平に着替へて今日の力抜く
（人）東　根　柴田　汀石

つちふるやいま蘇る平泉
（秀逸）盛　岡　遠藤あきよし

児童生徒

平泉小学校

夕ぐれに夕日かがやく秋の空
特選　四年　小野寺香乃

葉桜の下を義経馬で行く
特選　六年　石神　颯太

セミが鳴く短い命けん命に
特選　六年　加藤　慶

散歩道さくらまいちる平泉
秀逸　四年　志羅山ひかり

せみのから今でもそっととっている
秀逸　四年　岩間　大河

もうつうじあやめの花がさきほこる
秀逸　五年　千葉　雅人

蛙の子田畑で鳴くは親探し
秀逸　五年　小田島優理

ろてん風呂紅葉ながめいい気持ち
秀逸　六年　大内　史穂

長島小学校

泣きべそにホタルが来たよなぐさめに
特選　五年　小野寺美勇士

田植えして父の苦労が身にしみる
特選　六年　茶畑　匡由

貝がらを耳にあてると波の音
特選　六年　千葉奈津美

きれいですあさがおさいてよかったです
秀逸　一年　千葉奈々実

うんどうかいたばしね山も見ているよ
秀逸　二年　小野寺冬馬

雨上がり虹のかがやきさきれいだよ
秀逸　三年　千葉　純

つゆの朝きらりと光るしずくかな
秀逸　五年　佐々木　翔

夏の雨金色光る中尊寺
秀逸　六年　及川　翔

平泉中学校

紫陽花に大粒の涙光ってる
特選　一年　岩渕　悠平

夜の空ドンと笑顔が舞い上がる
特選　二年　高橋　舞

葉の上に蛞蝓（なめくじ）一匹絵を描く
特選　二年　滝沢　幸大

かぶとむしああかぶとむしとんでいく
秀逸　一年　岩渕　友里

ひまわりはいつもわたしの中に咲く
秀逸　二年　阿部麻里奈

赤蜻蛉（とんぼ）束稲山が目に映える
秀逸　二年　千葉　拓也

草ヨット僕の夢のせ永遠に
秀逸　三年　千葉　幹

定まらぬ色の紫陽花（あじさい）艶やかに
秀逸　三年　小野寺英里

〈「二夜庵」俳句大会より〉（平成十九年十月二十日）

剥落の半顔灼けて磨崖佛
兼題特選（小林輝子選）一　関　小野寺　亨

虫すだく経蔵裏のま昼かな
特選（菅原たつを選）一　関　小野寺東子

ひと雨に色増す菊の金色堂
特選（照井翠選）奥　州　岩渕　正力

稔り田に骨寺の絵図重ねけり
特選（照井翠選）一　関　大津　六朗

衣川

落葉踏む貞任の声山のこゑ
枯蔦に水音かくまふ衣川
ふぞろひの廃寺の礎石草紅葉
『寒雷』三月号〈暖響〉鈴木きぬ絵

月見坂楓若葉に息を継ぐ
『寒雷』八月号　岩手　小沢　優子

風薫るひと日頓写の衆となる
箒目にはや竹落葉中尊寺
『寒雷』九月号　岩手　佐藤　瑞穂

金色堂見てより歩く夏木立
『寒雷』十月号　埼玉　中山　洋子

雷はたと止みて開口能舞台
梅雨湿り忿怒を躍る増長天
『寒雷』十月号　岩手　小沢　優子

みちのく

みちのくの闇のはじめのちちろ虫
やんま去る金色堂はその奥に
鞘堂の柱の湿り草雲雀
芭蕉曾良の川を渡りて黒揚羽
『寒雷』十二月号〈暖響〉太田　依子

日高見川の流れ悠久天地澄む
浄土池渡る鐘の音秋澄める
『みちのく』一月号　斎藤その女

束稲山に煙まつはる夕焚火
『みちのみ』三月号　吉田　貞子

骨寺のいはれの岩や初時雨
『草笛』二月号　一関　佐藤　曲水

爽やかに貫主別れを惜しみけり
『草笛』二月号　一関　瀧口　千尋

春の雪能楽堂を降りつつむ
『草笛』六月号　盛岡　平野　冴子

一山が桜吹雪や中尊寺
『草笛』六月号　一関　砂金青鳥子

涼しさの山に登りて楸邨碑
『草笛』十月号　一関　小野寺　亨

五郎沼泰衡が精の蓮咲けり
『草笛』十月号　盛岡　佐藤　淑子

万緑や螺鈿七宝巻柱
清衡の供養願文蓮の花
歴史講座蓮に触れて終りけり
『草笛』十月号　奥州　高橋　清人

破れ蓮やいくさの敗因語り継ぐ
『草笛』十二月号　一関　鈴木きぬ絵

秋気満つ金色堂の月見坂
赤とんぼ共に歩めり平泉
『草笛』十二月号　盛岡　坂本　清江

読経の声満山に寒の雨
『たばしね』一月号　平泉　佐々木邦世

除夜の鐘余韻吸い込む浄土園
『たばしね』一月号　平泉　千葉　紀村

二ン月の竹伐る響き寺領より
『たばしね』二月号　平泉　斎藤その女

全山に声こだまする節分会
『たばしね』二月号　平泉　三沢　恵美

神事能終えて草刈る朝かな
『たばしね』五月号　平泉　佐々木邦世

萬緑を流れに映し歌あそび
『たばしね』六月号　平　泉　三沢　恵美

束稲山の峰麦秋の芯となる
『たばしね』九月号　大　崎　菅野志知郎

泰衡忌関山に湧く秋の風
『たばしね』九月号　平　泉　岩渕　洋子

いざよいの月や渺々衣川
『たばしね』十月号　平　泉　鈴木多佳子

静けさや青葉若葉の金色堂
「読売俳壇」七月　千葉　千葉　哲郎

みちのくの秋風ぬくるる毛越寺
「読売俳壇」十月　千葉　中村　重雄

＊　机辺の俳誌や新聞から、私の目に入った平泉の句を拾って書き留めました。

『寒雷』昨年十二月号に、神田ひろみ氏の

千手仏何も持たざる掌の黴びぬ

の句。「何も持たざる掌」とは、〈与願の印〉と申しまして、観音菩薩の慈悲の悲を現しているのです。

悲は、ひとの傷みを共に心傷めることです。その掌が黴びているとは、本を閉じてからもなにか気にかかり、今も、気になっている一句です。

（編者・邦世）

〔関山歌籠〕

（平成十九年四月二十九日）

〈第二十八回西行祭短歌大会入選歌〉

（神作　光一先生　選）

棟梁の指示に頷き金髪の地下足袋青年黙して動く
（中尊寺貫首賞）
仙　台　千葉　秋夫

自らに問ひてみづから答へつつ菜の花のさく遍路道ゆく
（平泉町長賞）
盛　岡　三条ヒサ子

小止みなく降り来る雪にたのみたる灯油の配達あやぶみて待つ
（平泉観光協会長賞）
栗　原　杉山百合子

「道草のように人生を生きてます」香けぶらせてみ墓の前に
（岩手日報社賞）
一　関　佐藤　峰子

ゆるめたるマフラー風に攫われて我より先に橋渡りゆく
（ＩＢＣ岩手放送賞）
北　上　遠藤タカ子

心臓がとび出しそうと席立ちし新任教師にエールをおくる
（岩手日日新聞社賞）
一　関　畠山　喜一

佳作

一瞬に願いひとつを言えぬまま夫の頭上をアツ流れ星
奥　州　勝山　秀子

足首を冷え這ひ上がる監査室熊の捕獲の数も調べて
奥　州　岩渕　正力

子の診療喜ぶ媼のくれし飴口にまろばせ家路を歩む　一関　高金　啓子

あちこちに合併すすみ消えて行った村に今年も蕗のとう芽ぶく　一関　高橋　芳子

いちにちの力にせよと呉れし友有精卵はほの温かりき　奥州　千田　庄子

下校児に気をつけてねと声をかけ夕づく道に行方みまもる　一関　阿部　哲雄

跳び箱にわれを見立てし幼子が声先立ててやすやすと跳ぶ　奥州　菊池トキ子

譲られし祖母から母への丸帯を初釜の席に我締めて出づ　一関　佐藤　道子

―――――――――――――――

一関地方短歌会・東北アララギ「群山」一関支部会員

札納め古刹に点る法灯の内陣しずか冬に入りゆく　阿部　哲雄

三代の築きし浄土に座をつらねさくら捧げて「西行」祀る　小岩　三男

寺庭の池暑く照る午の刻睡蓮の花皓く開きぬ　菅原　杜詩

用語辞典欲しいと呟き経文を播く兄がときに咳く　鈴木　幸子

真夏日の施餓鬼会に行く月見坂老杉の下いとど涼しも　高橋　英雄

戸河内へ関山沿ひに友を訪ふ桜さかりの夕べの道を　千葉　利二

義経の駒の足跡偲ばせて雪斑なる月見坂ゆく　村上せつ子

〔陸奥教区宗務所報〕　第二部　中尊寺関係

平成十八年十一月十五日～平成十九年十一月十四日

□　**平成十九年**

三月十九日
布教養成所研修会　参加者90名　於中尊寺
「師に聴く―仏教と現代―」
講師　末廣照純師　山内より二十三名参加

四月二十六日
第二五六世天台座主傳燈相承式
宗務所長（大長寿院）　菅原光中出席
一隅事務局長（満福寺）　千葉亮賢出席

五月二十一日
布教師会総会研修会　於毛越寺
「布教師の心得」
講師　山田俊和師　山内より十二名参加

六月二十一日～二十二日
天台宗保護司会民生児童委員会研修会・総会
於三河三谷温泉
地蔵院　佐々木秀圓出席

六月二十三日
陸奥仏青開宗千二百年記念研修　於天台寺
「光明供の修法について」
講師　菅野澄順師　山内より九名参加

六月三十日
人権啓発公開講座　於宗務庁
法泉院法嗣　三浦章興出席

八月二十六日～二十九日
教師安居会
圓乗院法嗣　佐々木五大出席

十月二十日
天台宗一斉托鉢　於般若寺（青森県）
山内より五名参加
集まった浄財十二万千二百五十三円は中泊町社会福祉協議会に寄託した
（翌二十一日は近辺の寺社を参拝し研修）

十一月十一日　於中尊寺
得度式
瑠璃光院　法嗣　菅野靖純・菅野裕康
円教院　法嗣　千葉晃雅
十一月十四日
陸奥仏青開宗千二百年記念研修
「光明供錫杖法要の修得」結願法要　於般若寺
山内より八名参加

□ **役職任免**（平成十九年四月一日）
天台宗典編纂所編纂委員
圓乗院　佐々木邦世
天台宗典編纂所電子佛典員
瑠璃光院　菅野康純
（平成十九年四月十九日）
日中友好天台宗協会顧問
天台宗国際平和宗教協力協会顧問
中尊寺　山田俊和
（平成十九年七月二十八日）
陸奥教区地方選挙管理委員会委員
釈尊院　菅野成寛
陸奥教区地方選挙管理委員会予備委員
真珠院副住職　菅野澄円
瑠璃光院　菅野康純（同年依願解任）
（平成十九年十月一日）
陸奥教区宗務所長・一隅教区本部長
大長寿院　菅原光中
陸奥教区宗務副所長・一隅教区副本部長
真珠院　菅野澄順
陸奥教区庶務主任・一隅事務局次長
観音院　清水広元
陸奥教区社会主任・一隅事務局員
瑠璃光院　菅野康純
陸奥教区財務主任・一隅事務局員
円教院　千葉快悛
陸奥教区・一隅教区本部監事
地蔵院　佐々木秀圓

一隅を照らす運動陸奥教区理事
圓乗院　佐々木邦世
一隅を照らす運動陸奥教区理事
積善院　佐々木仁秀
一隅を照らす運動陸奥教区理事
真珠院寺婦　菅野美弥子
開宗千二百年慶讃大法会事務局教区事務所長
日中友好天台宗協会参与
天台宗国際平和宗教協力協会参与
大長寿院　菅原光中
陸奥教区寺院問題対策委員
地蔵院　佐々木秀圓
陸奥教区所得調査委員
金剛院　破石澄元
陸奥教区名誉住職推薦委員
圓乗院　佐々木邦世
陸奥教区布教養成所所長
中尊寺　山田俊和
陸奥教区布教養成所事務局長
積善院　佐々木仁秀
陸奥教区布教養成所主事
圓乗院　佐々木邦世
（平成十九年十一月七日）
特別褒賞推薦委員会委員
門跡寺住職推薦委員会委員
日中友好天台宗協会理事
天台宗国際平和宗教協力協会理事
大長寿院　菅原光中
（平成十九年十一月八日）
叡山学寮運営協議委員会委員
大長寿院　菅原光中
（同年十一月十四日）
寺院教会所得調査基準審議会委員
中央所得調査会議長
大長寿院　菅原光中

□ **住職任命**

延暦寺一山教区実相院兼務住職　山田俊和
（平成十九年一月二十四日）

円教院住職　千葉快悛
（同年四月一日）

寶性院兼務住職　佐々木慎宥
（同年五月十四日）

千養寺兼務住職　菅野康純
（同年七月一日）

□ **褒賞**　（平成十九年十月二十三日）

一宗公職勤続功労者表彰　瑠璃光院　菅野康純

□ **教師補任**（平成十九年一月二十八日）

贈権大僧正　円教院　千葉快恩
（同年六月二十二日）

権大僧都　大長寿院法嗣　菅原光聴
権大僧都　法泉院法嗣　三浦章興

□ **経歴行階履修**

（平成十九年五月十一日）

開壇伝法履修　地蔵院法嗣　佐々木秀史
（同年　六月二十九日）

入壇潅頂履修　金剛院法嗣　破石晋照
（同年　六月三十日）

開壇伝法履修　金剛院法嗣　破石晋照
（同年　九月二十八日）

円頓大戒授戒会履修　金剛院法嗣　破石晋照
（同年　十月一日）

廣学竪義履修　金剛院法嗣　破石晋照
（同年　十月三日）

廣学竪義履修　圓乗院法嗣　佐々木五大

□ **遷化**　（平成十九年一月二十八日）

円教院　千葉快恩（八十二才）

☆ **黒石寺土砂災害見舞金**

金、十九万円　中尊寺内一山寺院

御神事能番組　五月四日

法楽
古実式三番

開口　三浦章興
祝詞　千葉快俊
若女　菅野澄円　（笛）破石晋照　（大鼓）佐々木秀厚　（小鼓）佐々木律秀　（後見）菅野宏紹
老女　菅原光聴

狂言
しびり　太郎冠者　千葉　遵　主　破石澄元

能
竹生島
天女　佐々木五大
ツレ　佐々木律秀
後シテ　北嶺澄照
前シテ　佐々木邦世
ワキ　菅野成寛
ツレ　佐々木秀厚
ツレ　菅原光聴
太鼓　菅野宏紹
大鼓　佐々木長生
小鼓　佐々木仁秀
笛　清水広元
間　破石晋照

古実式三番　五月五日

開口　三浦章興　（笛）破石晋照　（後見）佐々木律秀

狂言
清水　太郎冠者　菅野裕康　主　菅野靖純

能
秀衡
義経　佐々木五大
後シテ　北嶺澄照
前シテ　佐々木邦世
ワキ　菅野康純
ツレ　佐々木秀厚
ツレ　菅野光聴
太鼓　三浦章興
大鼓　千葉快俊
小鼓　佐々木仁秀
笛　菅野澄円
間　佐々木慎宥

秋の藤原まつり　中尊寺能　十一月三日

奉納仕舞

三輪　小島喜久子

岩船　千葉万美子

素謡

班女　シテ　白土　誠
六枚表サシより　ワキ　高橋百人
ツレ　小山恒則

狂言

昆布売　大名　破石澄元
昆布売　破石晋照

能

経政　シテ　佐々木五大
ワキ　菅野成寛
大鼓　佐々木長生
小鼓　佐々木仁秀
笛　佐々木秀厚

執務日誌抄

平成十八年十二月一日～十九年十一月三十一日

平成十八年

◇十二月

一　日　月次（つきなみ）大般若（本堂）

二　日　町上下水道事業運営協議会（管財部章興　於役場）。

七　日　薬師会（讃衡蔵）

秋期一山会議（大広間）

八　日　節分講中総会（法務　於泉橋庵）。

九　日　足利市阿部税氏来山（桜の苗木寄贈　貫首・執事長応接）。

十一日　総務部澄円、町観光キャラバン（～十四日、新潟・長野・会津）。

十二日　初詣警備会議（執事長・法務広元・管財澄照）。

十三日　貫首、岩手日報社インタビュー。

十四日　弥陀会（本堂）

貫首、朝日新聞社インタビュー。

ユニバーサルデザイン（以下、UDと略）グループ会議（管財部光聴　於町保健C）。

十五日　関東自動車工業会長内川晋氏他来山（貫首応接）。

十七日　白山会（本堂）

お経を読む会（大徳院）

平泉文化と北上川フォーラム（貫首・参務邦世　於ベリーノH）。

二十一日　平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。

二十三日　奥福寺様注連縄奉納（本堂）。

二十四日　文殊会（経蔵）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時　**一山総礼**

平成十九年

◇一月

一　日　〇時　**新年祈祷護摩供修行**（本堂）

七時　東山町〈若水送り〉着

九時半　正月祈祷護摩（本堂）

十時半　総礼

修正会　釈迦供（本堂）

結衆、冬堂籠り・開山堂（～五日、開山堂）

二　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　薬師供（峯薬師、讃衡蔵）

十六時　謡初め（広間）

三　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　山王供（山王堂）

十一時　元三会　慈恵供（本堂）

四　日　修正会　薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五　日　修正会　文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

梵焼供（結衆勤、開山堂）

本日より寒修行（行者六名、町内托鉢）。

六　日　修正会　釈迦供・月山供（釈迦堂）

七　日　修正会　白山十一面供（本堂）
大般若会（本堂）
十四時　修正会　弥陀供（金色堂）

八　日　修正会　薬師供（旧闕伽堂薬師、讃衡蔵）一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

十三時半　恒例「**金盃披き**」

十一日　文化財防火訓練事前打合せ（管財部章興　於役場）。

十二日　文化庁次長加茂川幸夫氏来山（執事長案内）。
第十回仙台青葉能実行委員会（参務邦世　於河北新報社）。

十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）
お経を読む会（貫首）

十八日　総務部澄円、盛岡へ出張（世界遺産登録前後の受入れ体制協力依頼　於観光協会事務所）。

十九日　文化財防火訓練打合せ（管財澄照・章興　於役場）。

二十日　江東区水掛御輿高橋富美男氏他四名来山（貫首・執事長応接）。

二十二日　念法真教総長桶屋良祐師他二名来山（貫首応接）。

二十三日　総務部澄円、仙台へ出張（四寺廻廊を機軸とした広域連携会議／以下、宮城ＤＣ会と略。　於宮城県自治会館）。

二十四日　執事長、比叡山へ出張（～二十六日、福聚教会本部長会議）。

二十八日　山内円教院住職千葉快恩大和尚遷化。

二十九日　**文化財防火訓練**
澄元、東京へ出張（野村万作師朝日賞授賞祝賀パーティー　於帝国Ｈ）。

三十日　群馬県下仁田常住寺（薗　様）弔問（貫首・参務秀圓・参務光中）。

◇**二月**

一　日　月次大般若（本堂）

三　日　恒例**大節分会**（関取朝赤龍招く。歳男歳女一〇二名、町内園児が豆を撒く）。

四　日　円教院快恩師葬儀（本堂）

八　日　平泉岩銀友の会新春講演会（執事長　於Ｈ武蔵坊）。
貫首、東京へ出向（瀬戸内寂聴師お祝いの会　於帝国Ｈ）。

九　日　北東北三県主催大阪・名古屋合同エージェント現地招待視察会一行十五名来山。
法儀研修（～十一日、譽田玄光師　大広間）。

十三日　執事長・参務邦世・総務仁秀、東京出張（～十四日、山田俊和師貫首就任祝賀会　於上野精養軒）。

十四日　涅槃会御逮夜（本堂）
総務部澄円、仙台へ出張（宮城ＤＣ会　於仙台市役所）。

十五日　**涅槃会**（本堂）
お経を読む会（積善院）
本坊境内施設整備検討委員会打合せ（三衡設計舎・渡辺事務所　管財　讃衡蔵会議室）。

十六日　関東自動車工業会長内川晋氏来山（貫首・総務対応）。
松井建設会長松井角平氏・東北支店長山本勇氏・郷家氏来山（貫首応接）。

十八日　骨寺村を語る会「中尊寺と骨寺村とのつながりについて」（参務光中挨拶・管財部光聴講話　於一関市本寺中学校）。

十九日　立正佼成会花巻教会会長綾部高士来山（総務応接）。
貫首、一関にて講話（「パウエルの会」　於ベリーノＨ）。

二十三日　町上下水道事業運営協議会（管財部章興　於役場）。

二十四日　町衣関地区発掘調査報告説明会（管財澄照　於二区公民館）。

二十五日　貫首、登叡（実相院兼務住職拝命）。

二十六日　平泉商工会土産品開発検討会（総務部澄円　於商工会館）。

二十八日　西行祭短歌大会実行委員会（総務仁秀他　於一関文化Ｃ）。
首都圏キャンペーン（澄円出張・東京ＧＡ半蔵門）

◇**三月**

一　日　月次大般若（本堂）
四寺廻廊事務局会議（法務広元・総務部澄円、仙台出張）。
町文化観光振興運営委員会（執事長　於役場）。

六　日　菊まつり協賛会役員会（総務仁秀・管財　広間）。

七　日　平泉観光協会主催「もてなしの心」向上研修会（職員三名受講　於Ｈサンルート一関）。

十　日　平泉観光協会理事会（快俊）。
ＵＤ（ユニバーサルデザイン）シンポジウム（管財部光聴　於郷土館）。

十二日　ＡＥＤ（自動体外式除細動器）普通救命講習（広間）。

十四日　**春期一山会議**（大広間）

十五日　平泉遺跡群検討会（於郷土館）。
十六日　貫首、盛岡にて講話（県観光協会全員協議会　於Hメトロ盛岡）。
十七日　北上川RCA（リバーカルチャーアソシエイション）「日本一の桜並木をつくる会」植樹開始式（管財澄照　於一関あいぽーと）。
十八日　宗務庁出版編集長横山和人氏来山（貫首応接）。
十九日　**基衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
布教養成研修会　講師谷中天王寺末広照純師（大広間　お経を読む会と合同）

二十一日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）
総代・世話人会総会（貫首・執事長・法務広元他　於平泉レスト）。
二十三日　AED普通救命講習（第二回、広間）。
二十四日　開山会（護摩供　開山堂）
二十六日　貫首、毘沙門堂門跡晋山式参列（於毘沙門堂）。
二十八日　AED普通救命講習（第三回、広間）。
町観光審議会（執事長）。
四寺廻廊連絡会（法務広元・総務部澄円　於東北歴史博物館）。
二十九日　平泉町世界遺産推進協議会役員会（執事長　於役場）。
三十日　AED譲渡式（岩手県心肺蘇生法普及事業推進会議、管財部光聴、於岩手医大）。

◇**四月**

一　日　月次大般若（本堂）
三　日　藤原まつり「源義経公東下り行列」主要役者記者発表（総務広元　於役場）。
四　日　日本舞踊上方舞吉村弥恵尋師来山（参務邦世・総務部快俊・役席律秀応接）。
六　日　平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。
澄元・管財澄照・光聴、仙台へ出張（NHK展企画委員会）。
七　日　天台宗陸奥仏教青年会托鉢（境内）。
仏青総会（於毛越寺）。
八　日　仏生会（本堂）
お経を読む会（円乗院）
九　日　陸奥教区寺庭婦人会岩手支部総会（執事長　於毛越寺）。
十一日　新規参入音声ガイド業者対策会議（管財部光聴・総務部澄円於役場）。
岩手県教育長相澤徹氏来山（執事長・参務邦世　応接）。
十二日　菊まつり協賛会総会（執事長・管財澄照他　大広間）。
四寺廻廊総会（総務広元・澄円・法務康純、仙台）。
十三日　神事能申合せ（大広間）
十五日　貫首、花巻にて講話（於立正佼成会花巻支部）。
十六日　藤原まつり警備会議（執事長・総務広元他　於西行苑）。
十七日　県商工労働観光部招聘事業中国エージェント一行十八名来山。
十八日　わらび座スタッフ来山（公演挨拶　総務応接）。
四寺廻廊懇談会（貫首・参務邦世・総務部澄円、仙台。　河北新報社社長一力氏・JR仙台支社長ほか同席）。
二十一日　世界遺産**植樹祭**（管財澄照　於大沢地区）。
陸奥教区寺庭婦人会総会（執事長　本坊大広間）。
恒例花まつり
二十二日　モンゴル国参事官ドルジパラム・ゲレル夫妻来山（貫首挨拶・参務邦世案内）。
二十三日　平泉商工会土産品開発検討会（総務部澄円　於商工会館）。
衣関桜友会清掃奉仕・観桜会（管財澄照・章興）。
中尊寺通りまちなみ整備検討会（管財澄照　於役場）。
町キャラバン実行委員会（総務部快俊・澄円　於役場）。
二十四日　平泉町観光推進実行委員会総会（執事長・総務広元・快俊・澄円・管財部光聴　於役場）。
平泉町世界遺産推進協議会総会（執事長・管財澄照・光聴）。
弁慶力餅競技保存会総会（法務康純）。
二十五日　平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。
立正佼成会花巻支部様来山（貫首講話御礼　総務応接）。
藤原まつり担当者打合せ会議（総務広元　於役場）。
二十六日　天台座主傳燈相承式（貫首、於延暦寺根本中堂）。
神事能申合せ（能舞台）
二十七日　管財澄照、東京へ出張（NHK世界遺産平泉展打合せ於文化庁）。
平泉観光推進実行委員会（総務広元・澄円、奥州市出張　於県南広域振興局）。
二十九日　西行法師追善法要（本堂）
第二十八回**西行祭短歌大会**（講師**神作光一氏「西行法師と旅」**）
三十日　**地唄舞奉納**（吉村ゆきぞの師他「八島」・「長刀八島」他　能舞台）。

◇**五月**

一　日　**春の藤原まつり**開幕
藤原四代公追善法要、稚児行列常の如し。
郷土芸能奉演（達谷窟毘沙門子供神楽）
二　日　開山護摩供（開山堂）

一関信用金庫新理事長小野寺勝宏氏来山（貫首・執事長応接）。
酒田三十六人衆佐藤英治氏ほか六名来山（貫首・参務邦世・総務応接）。
源義経公東下り行列レセプション（参務邦世・総務広元・快俊　於H武蔵坊）。
郷土芸能奉演（市野々神楽）
三　日　源義経公東下り行列（義経公役　俳優中尾明慶）
郷土芸能奉演（川西念佛剣舞）
東下り行列反省会（総務快俊）。
四　日　古実式三番
狂言「しびり」
神事能「竹生島」
五　日　開口・狂言「清水」
神事能「秀衡」
佐々木幸子氏（翁面奉納者）来山。
六　日　山王講（山王堂）
八　日　総務部澄円、山形へ出張（四寺廻廊　立石寺撮影）。
讃衡蔵運営委員会（委員長秀圓・管財澄照ほか　讃衡蔵会議室）。
澄元・管財澄照・光聴、仙台へ出張（NHK展担当者会議）。
九　日　松井建設社長松井隆弘来山（執事長応接）。
十　日　岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授阿部昭博氏来山（携帯UD情報システム実験報告　管財部光聴）。
十一日　仏教文化研究所会議（讃衡蔵会議室）。
AED標章山内出勤者へ交付（管財部章興　広間）。
十五日　国立科学博物館横山氏来山（管財澄照）。
十六日　高安流大皷職分国川純師演奏会（能舞台）。
警察友の会（執事長）。
県観光協会協議会（総務部快俊　於盛岡グランドH）。
十七日　町観光推進実行委員会（武田双雲師を囲んでの懇親会　参務邦世・総務部澄円　於H武蔵坊）。
一山互助会総会（広間）。
十八日　書道家武田双雲師来山（総務案内）。
二十日　貫首・参務光中・参務邦世、和賀へ出向（於和賀多門院）。
お経を読む会（釈尊院）
二十一日　東京西光寺様九名団参（貫首案内）。
陸奥教区布教師会総会・研修会（貫首講話　於毛越寺）。
交通安全協会理事会（執事長於ベリーノH）。
二十二日　「平泉の文化遺産」保存管理状況等現地指導会（筑波大教授斎藤英俊氏・東文研国際企画情報研究室長稲葉信子氏・県及び市町担当者十五名来山　管財　本堂・讃衡蔵・金色堂など）。
本坊境内施設整備検討委。

二十三日　管財澄照・光聴、茨城へ出張（茨城金砂郷薬師拝観）。
二十四日　宗教者懇話会「日中友好の夕べ」打合せ（貫首・参務光中・総務広元・快俊　於ベリーノH）。
平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。
二十五日　平泉商工会通常総会（執事長於商工会館）。
平泉菊花会総会（澄照・章興）。
二十七日　全国菅江真澄研究集会岩手大会現地研修一行来山。
二十八日　平泉観光協会総会（総務広元・快俊　於商工会館）。
参務光中、東京へ出張（東京最勝寺祭礼）。
一関教育事務所長ほか来山（世界遺産塾について　会議室）。
二十九日　県観光協会評議委員会（執事長　於盛岡マリオス）。
三十日　日中宗教者懇話会一行三十名来山（貫首案内）。

仙台青葉能（参務邦世　於東北電力ホール）。

◇六月

一　日　月次大般若（本堂）
四寺廻廊法要打合せ（法務康純・総務部澄円、於仙台電通）。
貫首、法話（東京金属工業（株）五十名　本堂）。
二　日　満福寺普山式（貫首・執事長他）。
四　日　伝教会（御影供　本堂）
ウェーサカ仏教会総会（法務康純　於一関）。
六　日　平泉をきれいにする会総会（管財部章興　於役場）。
ANAセールス㈱主催旅行代理店現地研修会一行二十名来山。
警察友の会総会（執事長　於ダイヤモンドP）。
七　日　大正大学同窓会様十名来山。
八　日　経済同友会様十名来山（参務邦世案内）。
九　日　喜桜会連合発表会（～十日、能舞台）。
貫首、正法寺へ出向（落慶祝）。
陸奥教区第二部檀信徒総会（教区所長光中・副所長澄順・社会広元　於H武蔵坊）。
十　日　法華経一日頓写経会（本堂）
十一日　総務部快俊、盛岡へ出張（岩手県観光協会主催教育旅行誘致宣伝部会総会及び花巻空港国際チャーター便歓迎実行委員会総会於いわて県民情報交流C）。
多田孝文師を囲む会（貫首・

執事長ほか　於H武蔵坊）。

十二日　本坊施設整備検討委員会。

十三日　四寺廻廊各寺院法要（本堂）。

十四日　NHK仙台佐藤健一・加藤史彦様来山（「世界遺産平泉展」挨拶　執事長・管財澄照・光聴応接）。

十六日　消防第五分団研修旅行（管財部章興、於北海道函館）。

四寺廻廊**慈覚大師報恩法要**（貫首・執事長・地蔵院・大長寿院ほか　於東北歴博）。

いけばな池之坊展（「花ありて心うるわし」総務広元　於Hサンルート一関）。

松島瑞巌寺様団参（千葉県石堂寺様二十六名団参（宏紹案内）。

十八日　布教師会（東北・北海道地区協議会（宏紹、山形）。

平泉商工会土産品開発検討会（総務部澄円　於商工会館）。

二十日　自在坊蓮光忌法要（本堂）

神奈川県全仏教青年部様十名来山（法務康純案内）。

本坊境内施設整備検討委員会。

二十一日　故西村公朝師奥様ほか四名来山（貫首挨拶、参務邦世案内）。

平泉をきれいにする会観光道路周辺清掃（管財部章興他）。

平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。

貫首、湯沢へ出向（～二十二日）。

二十二日　**了翁禅師三百年遠忌・木像開眼法要**（貫首参列　於湯沢市曹洞宗慈眼寺）。

二十三日　陸奥仏青研修会（～二十四日、講師菅野澄順師　於天台寺）。

了翁禅師研究会一行十七名来山（貫首挨拶）。

二十四日　北上川RCA総会（参務邦世於ベリーノH）。

二十五日　ウェーサカ式典（法務康純・秀厚・総代世話人　於一関長泉寺）。

二十六日　全日本仏教婦人連盟一行二十八名来山（貫首挨拶）。

二十七日　平泉水かけ御輿警備会議（管財部章興　於商工会館）。

二十九日　第四十六回平泉芭蕉祭全国俳句大会（於毛越寺）。

メトロユーザー会一行（岩手日報社関連新聞社他）三十一名来山（貫首挨拶・参務光中案内）。

◇七月

一日　月次大般若（本堂）

二日　北海道修学旅行誘客キャラバン（総務快俊～六日）。

三日　町営第一駐車場出入り口改良工事説明会（管財他　於二区公民館）。

五日　職員旅行第一班（～六日、青森十三湖と白神山地　広元・晋照同行　一行十名）。

貫首、一関にて講話（県厚生保護女性連盟主催「厚生保護女性の集い講演会」於一関文化C）。

七日　故鈴木清紀氏（元平泉町長）法事（執事長参列　於自宅）。

八日　**如法写経十種供養会**（頓写法華経奉納式）。

貫首、「身近な法話」初回（～九月二十四日までの第二・第四日曜日　本堂）

九日　職員旅行第二班（～十日、青森十三湖と白神山地　貫首・邦世・快俊同行　一行十五名）。

十日　管財部章興、盛岡へ出張（県環境生活部資源循環推進課主催「PCB廃棄物の保管事業者説明会」於いわて県民情報交流C）。

十一日　国道四号中尊寺横断歩道橋検討会（総務広元　於役場）。

東北仏青総会（～十二日、講師菅野澄順師　宏紹・光聴・章興・澄円・五大　於いわき市）。

十二日　観光ガイド講習会インストラクター二名・研修生二十名来山。

中国天台県一行十名来山（参務光中案内）。

中国天台県来泉御一行歓迎会（執事長・参務光中・秀圓・邦世於H武蔵坊）。

十三日　世界遺産塾講座打合せ（光聴）。

十四日　水掛御輿講中一行来山（貫首挨拶）。

平泉の文化遺産歴史講座一行五十名来山。

十五日　**平泉総社神輿渡御**

十七日　**清衡公御月忌**（胎曼供　本堂）。

讃衡蔵運営委員会

十八日　貫首インタビュー（日本航空お茶室）。

十九日　「慈覚大師円仁名宝展」参観（邦世・宏紹・五大　於東北歴博）。

県観光協会マスコミ招待会一行十一名来山。

二十日　近畿日本ツーリスト東日本営業本部支店長研修会（三十一名参務邦世案内）。

二十一日　町公民館主催「楽しく学ぼう！HIRAIZUMI」一行来山。

二十三日　世界遺産石見銀山研修（執事長・邦世・澄元・光聴・澄円　～二十五日）。

貯水槽清掃（管財部）。

二十四日　町世界遺産地域協議会（総務広元　於町保健C）。

二十五日　総務部澄円、鎌倉へ出張（観光推進実行委員会打合せ　於鎌倉武田事務所）。

二十七日　町景観形成審議会（於役場・現地視察）。

UDワーキンググループ会議（管財部光聴　於町保健C）。

二十八日　貫首、和賀にて講話（参務光中同行　於和賀・多門院）。

参務秀圓・管財部章興、紫波へ出向（五郎沼「古代ハスを見る会」）。

二十九日　中越沖地震募金托鉢（中尊寺仏青　境内）。

三十日　大池ハス開花

大正大学生「台友会」様三十名来山（貫首挨拶・参務邦世案内）。

文化庁本中調査官他八名来山。

大文字まつり警備会議（管財部章興　於西行苑）。

三十一日　参務邦世、滑川市へ出張（〜八月一日、奥の細道サミット）。

◇八月

一　日　月次大般若（本堂）

二　日　県南広域振興局職員来寺（総務応接）。

赤堂祭礼打合せ（法務康純・秀厚）。

三　日　世界遺産塾講座一行来山（管財部光聴案内　かんざん亭）。

衣関桜友会清掃奉仕（管財開山堂付近）。

立正大学仏教文化研修会一行二十三名来山。

日本テレビ系東京支社三十五名来山（参務邦世案内）。

本坊施設整備検討委員。

四　日　十五時半、〈平和の鐘〉打鐘。

貫首、「平和の祈り」法要参列（延暦寺）。

観光レクリエーション客動態調査（讃衡蔵前）。

六　日　文化庁記念物課長内藤敏也氏来山（執事長挨拶・参務邦世案内）。

七　日　結衆、夏安居（堂籠り　〜十一日、開山堂）

東京大学史料編纂所職員来山（骨寺絵図調査　管財）。

八　日　大文字まつり担当者打合せ会議（法務康純　於役場）。

JTB国内商品事業部小和瀬敏明氏来山（総務応接）。

九　日　平泉をきれいにする会「ゴミ持ち帰り運動」実施（管財部章興　於平泉前沢IC前広場）。

「平泉文化遺産」イメージ形成委員会（総務広元　於奥州地区合同庁舎）。

十　日　本坊境内施設整備検討委員会。

十一日　寺蔵文化財調査（〜十二日、旧覆堂年輪年代調査　奈良文研光谷拓実氏　管財立会）。

十二日　寺蔵文化財調査（化仏・丈六仏光背調査　滋賀県立大学富島義幸氏　管財立会）。

十四日　第三十一回中尊寺薪能

能「半蔀」（佐々木多門師）

狂言「素袍落」（野村万作師）

能「藤戸」（出雲康雅師）

十五日　町成人式（総務広元　於郷土館）。

ユネスコ「寺子屋運動」（募金活動・平和の鐘打鐘　本堂）。

十六日　第四十三回平泉大文字まつり

先祖代々追善法要（町内寺院於北上川館裏河川敷）。

二十日　毛越寺施餓鬼会（参務秀圓）。

世界遺産推進室八重樫忠郎氏来山（執事長・参務邦世・総務広元）。

二十一日　貫首、戸津説法会中見舞

二十二日　世界遺産推進室八重樫忠郎氏来山（執事長・参務邦世・総務広元・管財光聴　応接）。

二十三日　大施餓鬼会御逮夜（本堂）

二十四日　大施餓鬼会・放生会（本堂）

二十六日　紫波陣ヶ岡蜂神社大祭（法務康純出向）。

二十七日　イコモス現地調査（〜二十九日　貫首挨拶、執事長澄順・仏文研邦世・管財光聴対応説明）。

経蔵ドレンチャーデモンストレーション。

二十八日　長島時子先生来山（大池ハス視察　管財部章興・役場及川司氏）。

総務部快俊・澄円、盛岡へ出張（県庁商工労働観光部観光課）。

総務広元、江刺へ出向（江刺餅田史文保存会との話合い　於江刺藤原の郷）。

町上下水道事業運営委員会（管財部章興　於役場）。

龍玉寺施餓鬼会（参務邦世参席）。

◇九月

一　日　月次大般若（本堂）

春興・律秀、瀬見亀割観音祭礼出向。

讃衡蔵ギャラリートーク（邦世）。

二　日　埼玉県長福寺岩本教明師ほか十四名団参（貫首　本堂）。

三　日　泰衡公御月忌（金曼供　本堂）

岩手大学教育学部二十五名来山（釈尊院案内）。

中尊寺通り街灯整備推進委員会（総務部快俊　於観光協会）。

四　日　伝大池跡発掘調査（〜十一月、平泉町文化財C）。

福聚教会陸奥本部舞踊研修会

（～五日、大広間）。
平泉観光協会理事会（執事長於H武蔵坊）。
五日　東京最勝寺様四十名団参（貫首法話　本堂）。
県修学旅行誘致説明会（総務快俊、出張　～六日、　於札幌Hニューオオタニ）。
六日　寺蔵文化財調査（螺鈿平塵案調査　鎌倉後藤圭子　邦世立会　讃衡蔵）。
七日　県教委世界遺産担当課長中村英俊氏来山（執事長　応接）。
八日　讃衡蔵ギャラリートーク（成寛）。
紫波五郎沼薬師神社祭礼（参務秀圓出向）。
九日　**臨時一山会議**（広間）
十日　曼殊院執事長松影崇誓師来山（貫首案内）。
東京・県観光客誘致説明会（総務部澄円、～十一日、　於H日航）。
衣川橋切り替え工事説明会（管財部章興　於二区公民館）。
十一日　県南振興局長酒井俊巳氏来山（執事長・総務部快俊　応接）。
十五日　讃衡蔵ギャラリートーク（澄元）。
十六日　町敬老会（執事長　於平中体育館）。
十七日　**白符忌**（本堂）
十九日　赤堂稲荷例祭（護摩供）
二十日　ひろさちや師・立正佼成会十名様来山（貫首挨拶・総務広元案内）。
二十一日　町世界遺産景観整備委員会主催「東稲山桜下刈り」（参務邦世・管財部章興・管財職員参加　於東稲山）。
二十二日　讃衡蔵ギャラリートーク（光聴）。
二十三日　秋彼岸会法要（本堂）
お経を読む会（法泉院）
讃衡蔵運営委員会
二十四日　**貫首、「身近な法話」最終日（本堂）**
二十六日　「平泉文化遺産」イメージ形成委員会（総務部澄円　於水沢翠明荘）。
町花壇コンクール表彰式（管財部章興　於役場）。
二十八日　福島教区圓福寺矢島寛章師ほか三十九名団参（参務光中挨拶・宏紹案内）。
二十九日　**佛教文学会平泉大会**（～三十日　仏文研所長邦世講演　かんざん亭）。
讃衡蔵ギャラリートーク（光聴）。

◇十月

一日　月次大般若（本堂）
国彩ひらいずみ情報発信事業委員会・世界遺産登録イベント検討委員会（総務部澄

円　於観光協会）。
本坊境内施設整備検討委員会。
二日　慈眼会（本堂）
中尊寺通りまちなみ整備検討会（総務部快俊　於役場）。
一山協議会（大広間）。
三日　平泉散策ガイドマップ作成委（総務部澄円　於観光協会）。
四日　浄土宗東京教区青年会様十八名来山（円乗院法話　本堂）。
ＡＮＡ系旅行商品「台北尊爵假期」研修視察一行十名来山（総務部快俊挨拶）。
菊まつり協賛会役員会・実行委員会（執事長・管財　広間）。
五日　北陸電力関連会社一行来山（参務邦世案内）。
「万作・狂言十八選」（能舞台）。
九日　曹洞宗宮城県第十七教区仏青会様六名団参（宏紹案内）。
めんこいウォーク打合会（総務部快俊　於役場）。
栃木県博千田孝明氏来山（円仁展貸出宝物返却　管財）。
十日　中尊寺訪中団出発（～十六日、北京・天台山方面　貫首・執事長・地蔵院・大長寿院・円乗院）。
町社会福祉大会（総務広元　於郷土館）。
十一日　平泉ホームページ委員会（総務部澄円　於観光協会）。
十二日　坂下交差点検討会（総務広元・快俊・澄円　於役場）。
十三日　平泉町公民館主催「わんぱく塾」三十六名来山。
特史跡無量光院跡第十九次調査現地説明会（管財部光聴）。
十四日　お経を読む会（常住院後住長生）。
十五日　世界遺産登録イベント検討委員会（総務広元　於観光協会）。
佐賀県二階寺様三十三名団参。
中尊寺通り街灯整備委員会（総務部快俊　於観光協会）。
十六日　シンガポールＡＮＡ二十三名来山。
能申合せ（大広間）。
十七日　貫首、法話（岩手日報県南四広華会合同三十名　かんざん亭）。
十八日　仙台市博樋口智之氏・酒井昌一郎氏来山（管財部光聴）。
東京昭島市観音寺伊藤賢祥様ほか四十名団参（積善院案内）。
十九日　平泉ＵＤ観光情報システム社会実験（管財部光聴　於毛越寺）。
白虎堂例祭
二十日　菊まつり開闢法要
一隅托鉢会（～二十一日、於青森般若寺）。
二十一日　めんこいテレビ主催めんこいウォーク一行来山。
翠曜会㈶二十一世紀職業財団十名様来山（執事長挨拶・案

内）。

二十二日　貫首、「比叡の光」インタビュー。

本坊境内施設整備検討委員会（渡辺治氏他一名同席　応接）。

群馬教区世良田部右嶋考真師ほか四十四名団参（宏紹案内）。

二十三日　東京教区第一部五十五名団参（貫首挨拶・総務広元案内）。

二十四日　臨済宗下谷全生庵様来山（団参打合せ　総務部澄円応接）。

全日本仏教会川島宏之様三十名来山（貫首挨拶・章興案内）。

平泉散策ガイドマップ作成委員会（総務部澄円　於観光協会）。

二十五日　郡上市白鳥町自治会長会様十六名来山（貫首挨拶・光聴案内）。

二十六日　讃衡蔵館蔵品展**「帰ってきた金字経」**開催（～十一月十八日）。

参務邦世、日光へ出張（日光うるし博物館開館十周年記念展）。

宮城女子大学大田典氏来山（貫首応接）。

二十七日　東京清水寺青木親純師ほか三十四名団参（貫首挨拶・章興案内）。

讃衡蔵館蔵品展展示解説会（澄元　讃衡蔵）。

富岡八幡宮神輿連合会八鳩会奉納額受納記念祝賀会（貫首・邦世　於H武蔵坊）。

二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）

富岡八幡宮神輿連合会**八鳩会額奉納**（本堂）。

貫首、東京へ（～三十一日）。

二十九日　大池跡発掘調査現地説明会（管財部光聴他　於大池発掘現場）。

三十日　水戸護国寺様十五名団参（総務広元案内）。

能申合せ（能舞台）。

三十一日　平泉文化遺産観光振興関係者会議（総務広元・快俊・澄円　於役場）。

一関警察署警察官友の会十五周年記念式典（執事長　於古戦場）。

◇十一月

一　日　秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児行列常の如し。

郷土芸能（達谷窟毘沙門神楽）

平泉観光協会観光ルネサンス事業実施委員会（執事長於観光協会）。

県観光協会主催旅行エージェント会議（快俊　於H武蔵坊）。

二　日　菊供養会（本堂）

県観光協会主催旅行エージェント招待会七名来山（快俊）。

貫首、法話（本堂）

郷土芸能奉演（一関　市野々神楽）

三　日　中尊寺能「経政」、狂言「昆布売」、謡・仕舞（喜桜会奉納能舞台）

郷土芸能（衣川川西剣舞）

五　日　立正佼成会郡山教会会長渡邊様

ほか四十名来山（執事長挨拶）。

坂下交差点検討会（総務広元・快俊　於役場）。

平泉商工会土産品開発委員会（総務部澄円　於商工会館）。

狂言野村万作師人間国宝祝賀会（貫首　於帝国H）。

六　日　文化庁文化財部長大西珠枝氏来山（管財部光聴）。

八　日　東京下谷仏教会八名団参（澄円案内）。

「平泉文化遺産」イメージ形成委（総務広元　於水沢翠明荘）。

玄妙寺総代磯部克介氏来山（貫首挨拶）。

九　日　社会福祉法人衣川会はごろも様十五名来山。

如法写経十種供養会（本堂）

大分歴史と自然を学ぶ会様来山（貫首挨拶）。

貫首、法話（四寺廻廊　大広間）。

讃衡蔵展示解説会（邦世）。

十　日　**瑠璃光院・円教院法嗣得度式**（本堂）

菊まつり表彰式（菊花会会長・前一関信用金庫理事長八重樫次男様へ感謝状贈呈）。

十二日　貫首、本山へ出向（～十六日）。

県観光協会おもてなしマイスター認定研修五十八名見学。

町上下水道運営協（管財部章興）。

東北運輸局長内藤政彦氏・町長高橋一男氏来山（執事長）。

十三日　南総教区妙楽寺様十名団参（本堂回向　康純・宏紹・澄円）。

十四日　岩手県環境生活部主催「日本・中国青年親善交流」一行四十四名来山。

十七日　長島小学校統合三十周年記念式典（総務部快俊）。

二十日　岩手ブランチ懇話会十名来山（貫首法話）。

二十二日　平泉観光協会理事会（執事長於観光協会）。

外国人観光客対応会議（平泉通訳センター運営委員会（一関警察署地域課長同席　総務部快俊）。

貫首、江刺にて講話（江刺観光物産協会　於江刺多目的ホール）。

二十三日　天台会御逮夜（結衆勤　本堂）。

二十四日　**天台会**厳修（御影供　本堂）。

ＮＨＫ「ニッポン心の原点」撮影（貫首）。

二十五日　第二十四回平泉町民号（～二十七日、律秀参加　九州宮崎方面）。

二十七日　一関菊花会菊花展表彰式（管財部章興　於一関文化C）。

「平泉文化遺産」イメージ形成委員会（総務部広元　於水沢）。

二十八日　貫首・総務広元・快俊、盛岡へ出向（達増拓也県知事へ挨拶）。

二十九日　貫首、朝日新聞インタビュー。

平泉菊花会中尊寺菊まつり反省会（管財部章興）。

中尊寺宝物館　讃衡蔵　テーマ展　〈予告〉

「平泉」伝承の諸仏

会期　平成二十年十月二十八日（火・藤原秀衡公御月忌（ごがっき））
～同二十一年四月二十四日（金）

会場　中尊寺讃衡蔵

奥州藤原氏初代清衡公は戦乱で命を失った生きとし生けるものの霊を浄土に導くため平泉に中尊寺を建立し、さらに陸奥・出羽国内の村ごとに伽藍を建立して仏教にもとづく治政をおこなったと伝えられています。二代基衡公、三代秀衡公も深く仏教に帰依して造寺造仏の作善をおこない、今なお各地に藤原氏ゆかりの寺院や仏像が伝えられています。

今回、所蔵者・管理団体をはじめ、関係各位の皆様のご厚意により、各地に長く伝えられ信仰されてきた「平泉」伝承の諸仏を中尊寺へお招きするはこびとなりました。これら諸仏に来臨いただくことによって仏教にもとづく藤原氏の平和、平等の理念を讃仰致したいと存じます。

出展予定の御尊像

重要文化財　薬師如来坐像（茨城県常陸太田市西光寺蔵）
木造　漆箔　像高一四三・七㎝
平安時代（十二世紀）
藤原清衡公の娘君であった、佐竹昌義の妻によって建立された寺院の本尊

岩手県指定文化財　日光・月光菩薩立像（岩手県奥州市黒石寺蔵）
木造　漆箔　像高一〇〇㎝
平安時代（十二世紀）　※両像とも
藤原基衡公の寄進仏として伝えられる御像

重要文化財　大日如来坐像（中尊寺瑠璃光院蔵）
木造　漆箔　像高五六・一㎝
平安時代（十二世紀）
中尊寺支院に伝わる藤原氏の時代の尊像　他

このテーマ展に関するお問い合せは
中尊寺　管財部　までお願いいたします。
☎〇一九一－四六－二二一一

御奉納者　御芳名

平成十八年十二月～平成十九年十二月

一、金銀字交書般若心経一巻　岐阜県恵那市　今泉しのぶ様

一、奉納額　富岡八幡宮奥会八鳩会様

一、だるま　群馬県　だるまの大門屋様

一、注連縄　奥福寺様

一、節分豆　10㎏　江刺市　佐賀秀一様

一、もち米　25㎏　千葉卓治様

一、御浄米　300㎏　立正佼成会郡山教会様

一、御供米「骨寺荘園米」30㎏
一関市　本寺地区地域づくり協議会様

浄財御奉納者　御芳名

平成十八年十二月～平成十九年十一月

宝珠山　立石寺様	三万円
㈲平泉観光写真社様	五十万円
海鋒　守様	三万円
念法眞教　総本山　金剛寺様	五万円

前沢歴史の会様　三万円
パウエルの会様　三万円
㈱鶴屋百貨店様　十万円
山田泰枝様　八万円
㈱ミヤノ様　四万円
立正佼成会　花巻教会様　三万円
吉村ゆきぞの様　十三万円
吉村弥恵尋様　三万円
国川　純様　九万円
西光寺　京戸慈孝様　十万円
日中友好宗教者懇話会様　十万円
藻原寺　持田日勇様　三万円
東京金属工業株式会社様　五万円
満田千枝子様　五万円
阿部　税様　三万円
佐藤芙蓉様　五万円
五明和子様　百万円
大聖院　多田孝文様　三万円
円勝院様　三万円

観音教寺様　三万円
社団法人　全日本仏教婦人連盟様　六万円
最勝寺様　二十一万円
最勝寺　団体参拝団様　七万円
浄土宗　東京教区青年会様　三万円
一関広華会様　五万円
一関信用金庫　小野寺勝宏様　五万円
立正佼成会　盛岡教会様　三万円
翠曜会様　五万円
長光寺様　五万円
天台宗　世良田部様　五万円
東京教区第一部参拝団様　五万円
成就寺様　三万円
全生庵様　六万円
千田孝信様　十万円
富岡八幡宮　神輿総代連合会　八鳩会様　五万円
清水寺様　十万円
立正佼成会　郡山教会様　三万円
一関信用金庫　平泉支店様　三万円

赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名

平成十九年一月～十月

平泉町　千條住建様　一基
千葉製材所様　一基
川嶋印刷株式会社様　二基
一関信用金庫様　一基
小岩製材所様　一基

不動尊篤信御奉納者　御芳名

平成十九年一月～十一月

富良野市　南砂利工業様　三万五千円
野村隆様　季毎御供物
青森県平賀町　笠原不動院代表小笠原喜世様　四十四万二千八百円　御供物・献酒
南部町　工藤銀四郎様　季毎御供物

弘前市　笹　隆治・哲子様　季毎御供物
十和田市　慧光商事代表　村上勝行様　三万円
大仙市　㈲ベル美容室　高橋紀美世様　季毎御供物　三万円
秋田市　工藤アヤ子様　五万円
秋田市　佐藤イネ子様　五万円
盛岡市　野口芳子様　三万円
二戸市　小林福次郎商店　小林清治様　三万円
二戸市　米沢　励様　季毎御供物
奥州市　佐々木　久様　三万円
平泉町　㈲ケーテック　芦萱敬一様　十三万九千円
一関信用金庫平泉支店様　三万円
千葉初夫様　季毎御供物
千葉製材所様　三万円
岩間　洸様　季毎献酒
川嶋印刷株式会社様　十万円
一関市　豊隆軌道　千葉幸八様　三万円
㈱精茶百年本舗様　衡年茶千五百個　五万円
炉ばた一八　渋谷正幸様　三万円
栗原市　金成工務店様　三万円

大崎市　岸　久幸様　三万円
日環エンジニアリング株式会社様　三万円
仙台市　仙台大原簿記公務員専門学校様　三万円
池田惠美子様　季毎御供物
水戸市　藤枝惠枝子様　季毎御供物
郡山市　㈱スタンドサービス吉田幹夫様　三万円
中野区　中村武司様　三万円
港　区　吉澤英之様　三万円
和泉市　辻林正博様　六万円

浄財募金

新潟県中越沖地震義援金

一隅を照らす運動総本部へ　二十八万二千四百六十八円
新潟県災害対策本部へ　二百六十三万四千六百二円

高砂部屋　朝赤龍関とご一緒に

〔二月三日〕

「大節分会」歳男　歳女

お申込み承ります

中尊寺の節分会には、歳男・歳女そして大相撲関取を迎え、近隣からも大勢の人が参集し、おかげさまで毎年境内がとても賑やかです。

ことに、中尊寺伝承の『魔滅大師』（まめだいし）は、七難を払う護符であり、「雨過天晴」苦難を乗り切る心意気を示すものと好評です。

節分の護摩祈祷を申し込んで元気をいただき、魔滅大師を各家の玄関・戸口に貼って吉祥の印とされますようご案内申し上げます。

・厄年（数え）男　二十五歳・四十二歳（大厄）・四十九歳・六十二歳
　女　十九歳・三十三歳（大厄）・三十七歳
・還暦（数え）六十一歳（昭和二十三年生まれ）
・当たり年　子年生まれ

詳細は、中尊寺事務局 法務部 までご連絡ください。
☎〇一九一－四六－二二一一

後記

▽　いつにも増して多くの賀状をいただいた。遠近を問わずその多くは「いよいよ世界遺産ですね」といった期待入れである。たしかに、最近は近在の青年もご老人も「浄土」について気軽に問いかけてくれる。世界遺産の前倒し効果といえば言えよう。

▽　問題は、寺であり、われわれ住職の意識であろう。社会的役割とか宗教間の対話などといった次元でなく、また逆に、特殊に籠もったりするのでもなくて、自らに深く領くものがなくてはならない、ということだ。

▽　「それでよろしいのか」、かつて漆工芸の松田権六氏が言われた一言を思いだしている。

今回より若手の破石晋照君に編集に加わってもらった。期待しよう。

――〔編集責任者　佐々木邦世〕――

中尊寺〈寺報〉『関山』第十四号
平成二十年（二〇〇八）一月二十日
発行　中尊寺（執事長　菅野澄順）
〒〇二九－四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱

〈発行　中尊寺〉